839
20
57

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

三圍稱荷社　小梅村田の中小あり　別當は天台宗延命寺と
号す　神像は弘法大師の作なり　同大師の勸請なりと
云　文和年間三井寺の源慶僧都再興せり　慶長の頃近代
あり　此地より移せる當社の内陣より　英一蝶の畫ける牛若丸と
辨慶ら半身の圖を掲たり
五元集　牛嶋ころもの神前より雨をすゝめらるゝ

夕立や田をへだてゝの神ごと

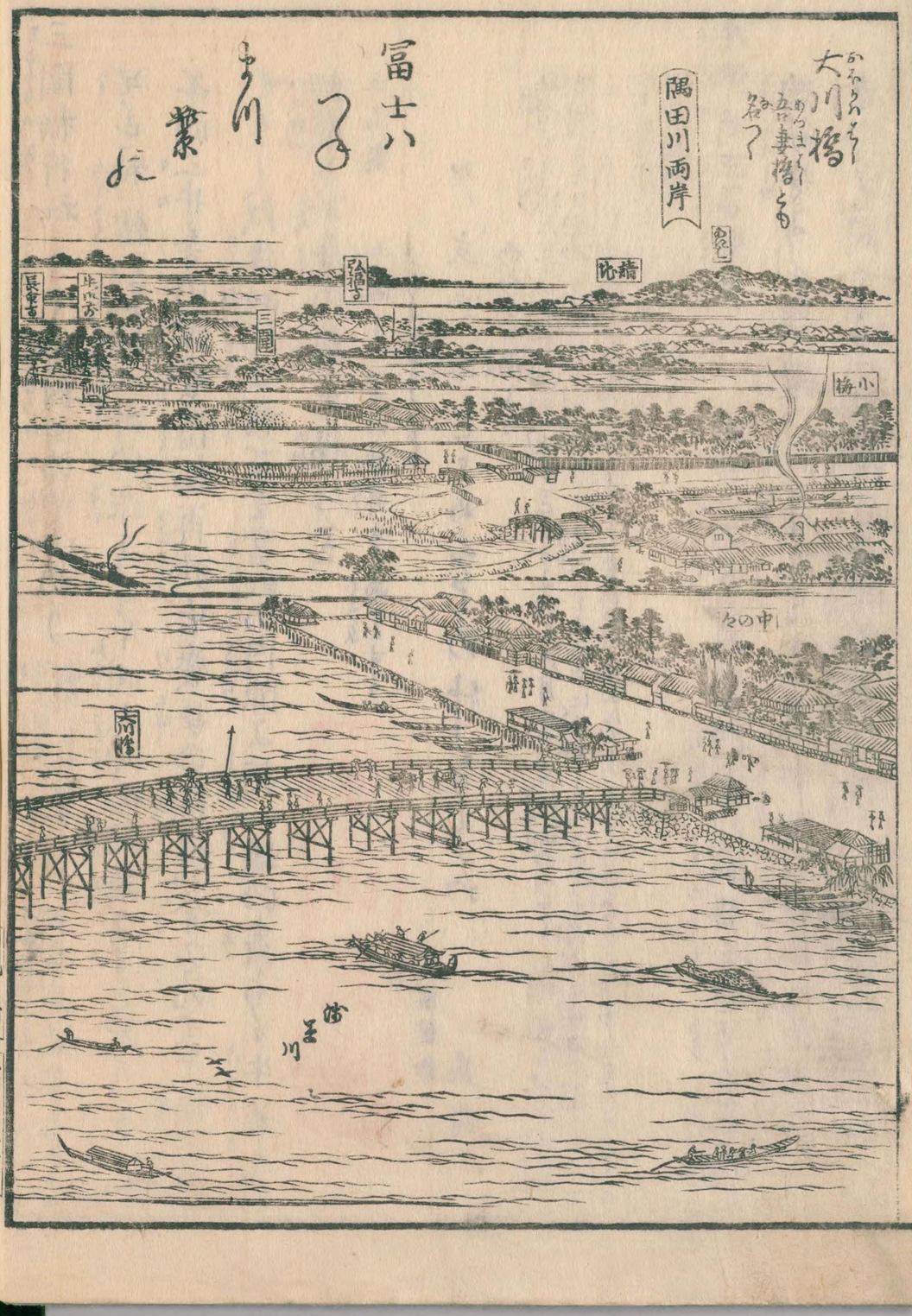
ある日雨ふる

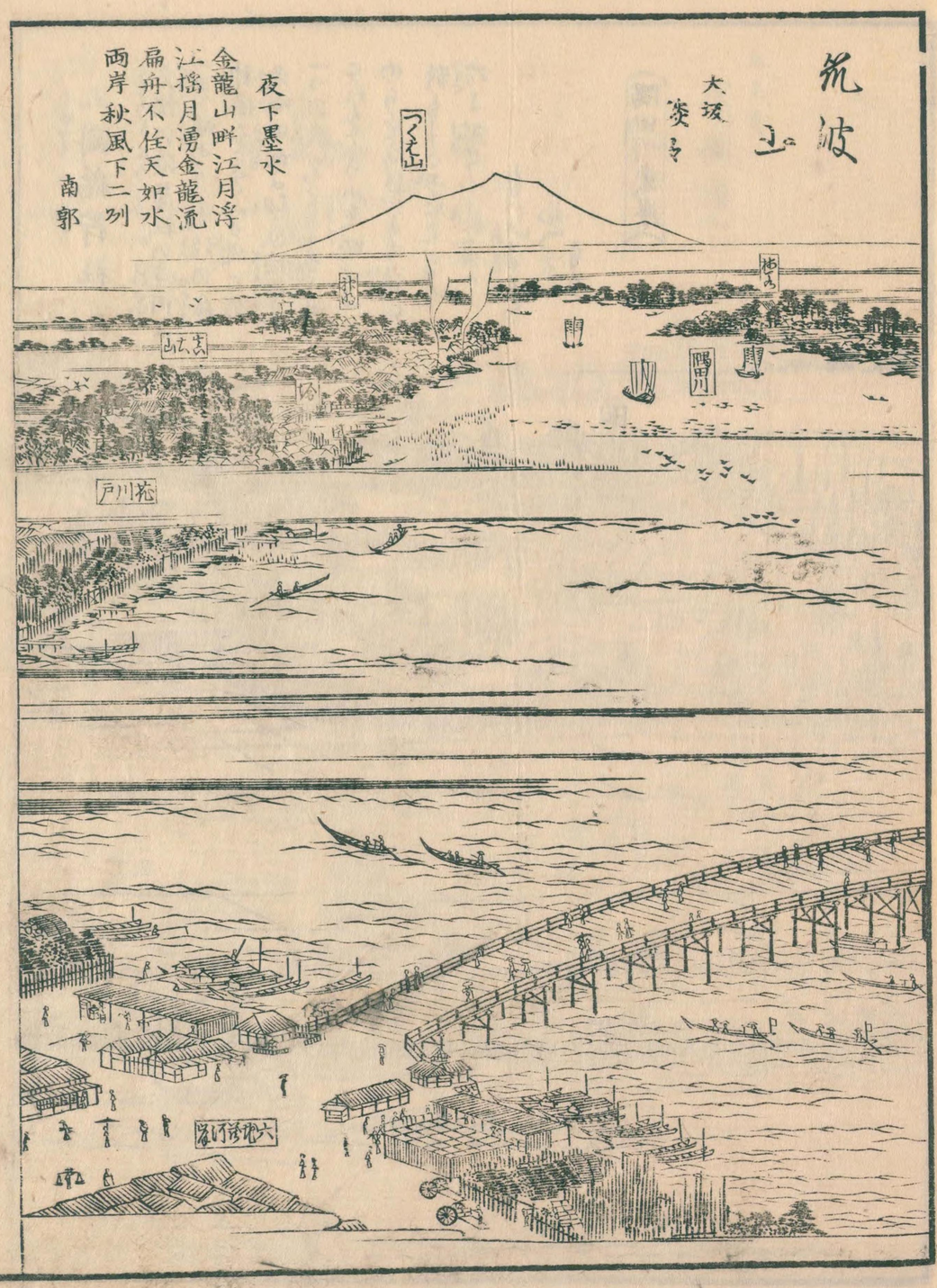
社僧云元禄六年の夏大旱數旬なりしかば村民あつまりて神前にて
祈禱せしに其日其角も當社へ詣せしに俄に雨の降ありしかば
よろこびすゝめられ農民よろこぶそを連ねて當社の神前よりそこを
なりしかば其角感吟ありしその日喜雨の
今も當社にて傳へ行ふ事あり

牛御前王子權現社　同所北の方よりあるこ別當は最勝寺と号す牛嶋の
總鎮守なり　祭禮は陽年九月十二日北本所石原新町の旅所へ神
幸ありて同十五日小帰輿を祭神素盞烏尊　牛御前
と稱す　清和天皇第七

曹山文庫
根岸信補氏寄贈
昭和

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用




夜下墨水

金龍山畔江月浮
江搖月湧金龍流
扁舟不住天如水
兩岸秋風下二列

南郭

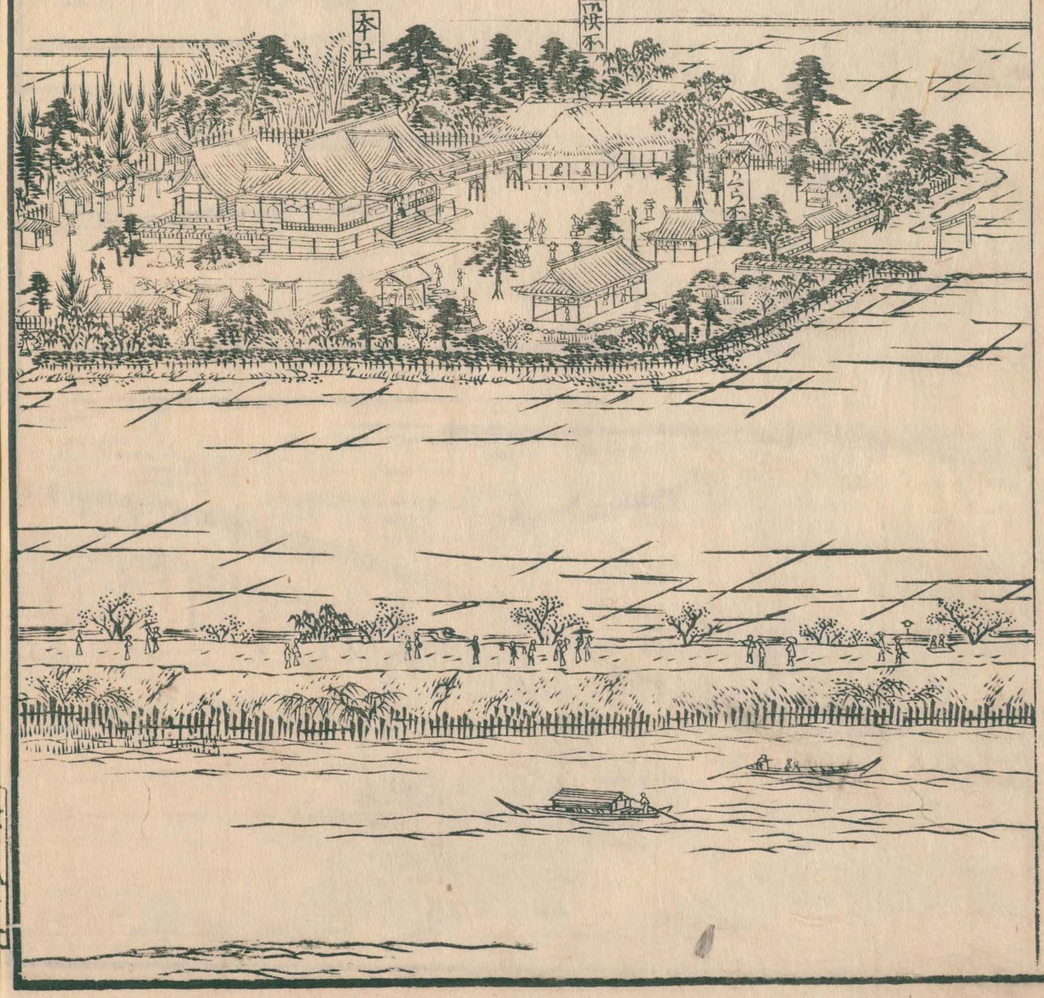
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

## 三圍稲荷社

えん禄の頃当社の境内より一老嫗あり奉行の徒弟共をさそふ此ころの老嫗田面よりひろひ拘堂へ一つの狐りくともあくまりくれを食ふ老嫗世よめらそのしより後へ狐もまたこゝにとゞまりよく記せり其角

白いさぎをいくるまり

隅田川東岸




五元集

早稲酒や

きり祝

ふひ出を

焼ゐ

そと

其角

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

# 牛御前宮　長命寺

隅田川東岸



五之集
牛御前

是やうれ
雨を
乞人
ト
ちゝみ

其角



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

俳諸師水西子の
囲ひ給ふまの
境内竹叢の中に
あり今其あらゝを
芭蕉翁の白碑を
建たり

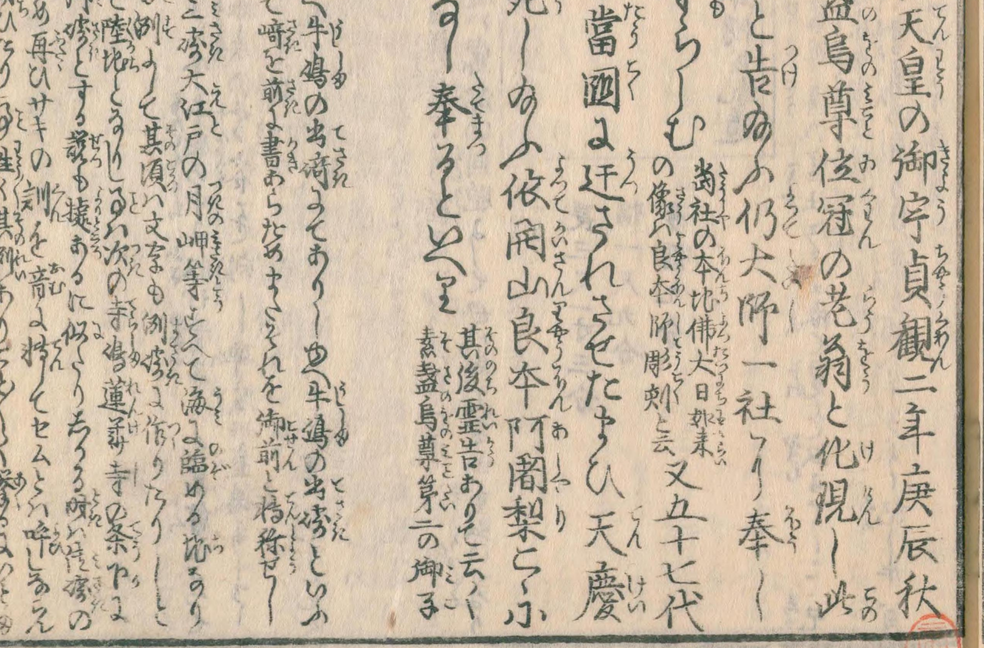
隅田川東岸

いさはらん
雪見ころの
こゝろ迄
ま
く

皇子と称せ王る権現と称せ
昔ふ二坐り相傳清和天皇の御宇貞觀二年庚辰秋
九月慈覚大師東國弘法の頃素盞烏尊位冠の老翁と化現し此
地に跡を垂れ給ふ因て國家を守護らんと告給ふ仍て大師一社づゝ奉し
上皇の良本門閻梨を留て是等守らしむ
陽成院の御宇清和帝第七の皇子當國を迂されさせたまひ天慶
元年丁酉九月十五日此地に於て薨し給ふ
葬を奉ふ牛御前の相殿に合祭るなり奉ると
なん

社の本地佛大日如来
の像は良本阿闍梨彫刻と云又五十七代

故ふ讃州鵜田御崎筑前筥御崎其余相別のニ
今當社の辺を須賀村と名はくるもの
あり〳〵ゆゑ〳〵故あるべし蒼海よ濱〳〵半里を歴て陸
はまひちかり其条ゆをめぐる叶ひ牛の御嶽とする
傳も提あるに似くりろる時は疑の
假家の美を飾とし崎の文字をも前よ書あらなをさゝれを
あらさ故ふとれを異也



法華経千部供養碑　今内陣ニ収むあり長三尺三寸あまり闇ニ六寸あまり

碑陰銘曰

奉造立釋迦像一軀

貞観十七丁未天三月日

法華千部

明王院

この傍ニ往古社境内の土中より掘り出すところ今本殿の中ニ収む青石にて其質のごとく堅し上下欠損して全からず碑面ニ立像の釋迦如来の彫像を刻し鮮明なり

千葉五郎胤道

一流

別當最勝寺

武蔵上総権介廣常の子千葉次郎常胤の孫ニして總の國府ニ住す

胤道同弟東六郎胤頼等の名あり胤道い常胤の同胞ニして母い秩父五郎重弘の女なり

長三尺一寸三分

幅一尺九分

厚幅九分

同添状　壹通

梶原景季書

其文ニ曰く社の往古先祖千葉介常胤再興の宮社たるニ依て是を収るところ也

慶長十八年九月十九日　圀分宗兵衛正勝殺向とあり

石橋山合戦ニ記ス処分捕の頭ニ書物の通り見ニ奉ニ御へ早ニ記し申すべく候

廿三日景季未とありて花押を加へ

小田原北条家神領寄附状　壹通

其文ニ曰く当社の往古先祖千葉介常胤再興の宮社たるニ依て是を収るところ也

慶長十八年九月十九日圀分宗兵衛正勝殺向とあり

石橋山合戦ニ記ス処分捕の頭ニ書物の通り見ニ奉ニ御へ早ニ記し申すべく候

廿三日景季未とありて花押を加へ

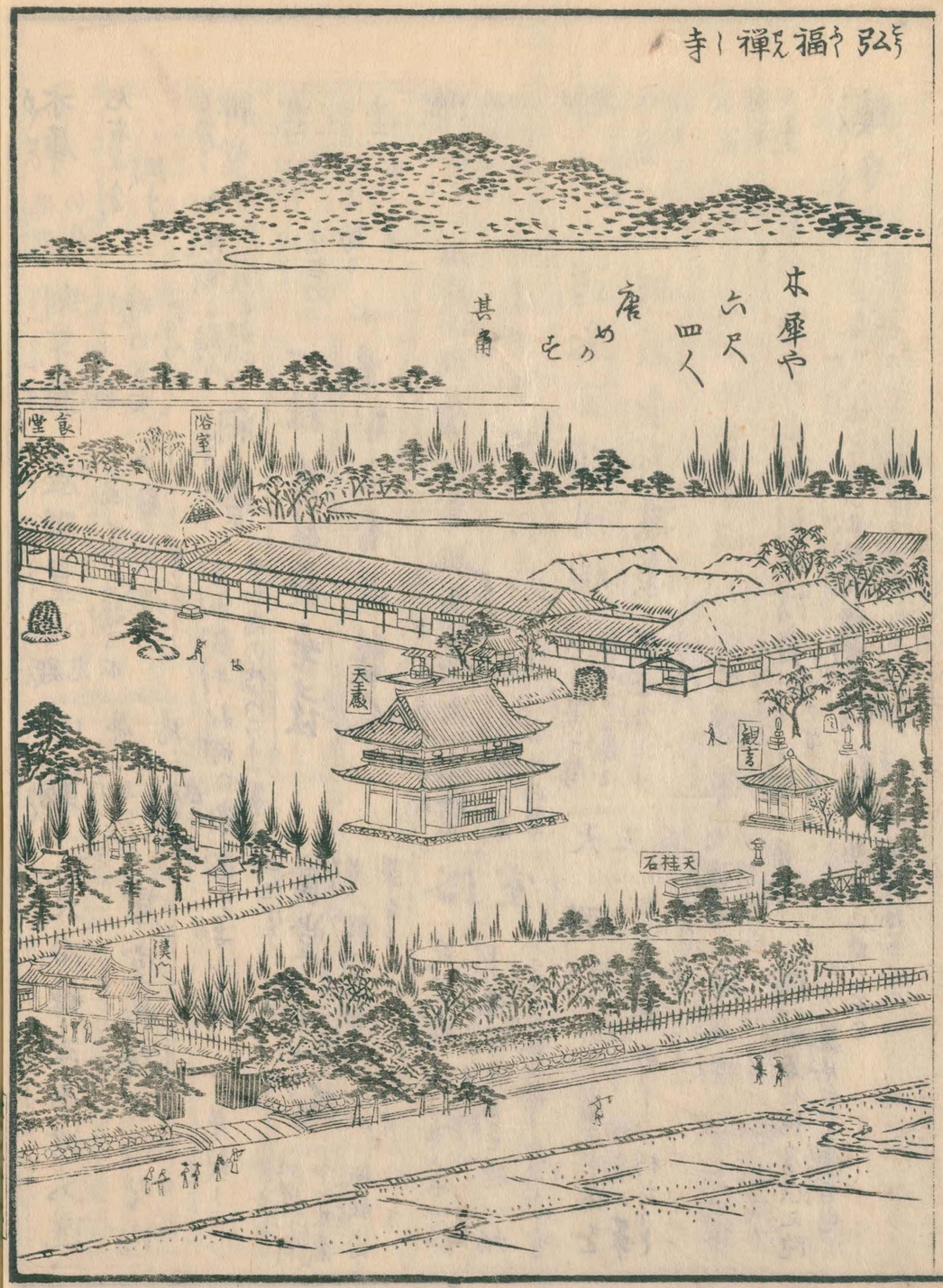
當寺昔ハいさゝの庵室なりし寛永年間　大樹御遊猟の砌ゝ御不豫
小あらせられしより此寺内より休らせたまひ庭前の井の水をもて御藥を服
あらしふ須臾にして常ふるのらせあひしより此井を長命水の号を賜ひ
寺の号をも改むへき旨　台命ありしかとも昔より東長命寺と称
殊更當ちふ雪の名所ゝて前より隅田川の流をうけて風色たくひなし
牛頭山弘福禅寺　牛御前宮の東より隣る此辺を須崎とのゝよび傍
の禅室より洛陽萬福寺を摸せし本尊ハ唐佛の釋迦如来左右ハ迦葉
阿難なり定山鐵牛和尚延寶紀元癸丑創造す毎歳七月十五日大施餓鬼修行有



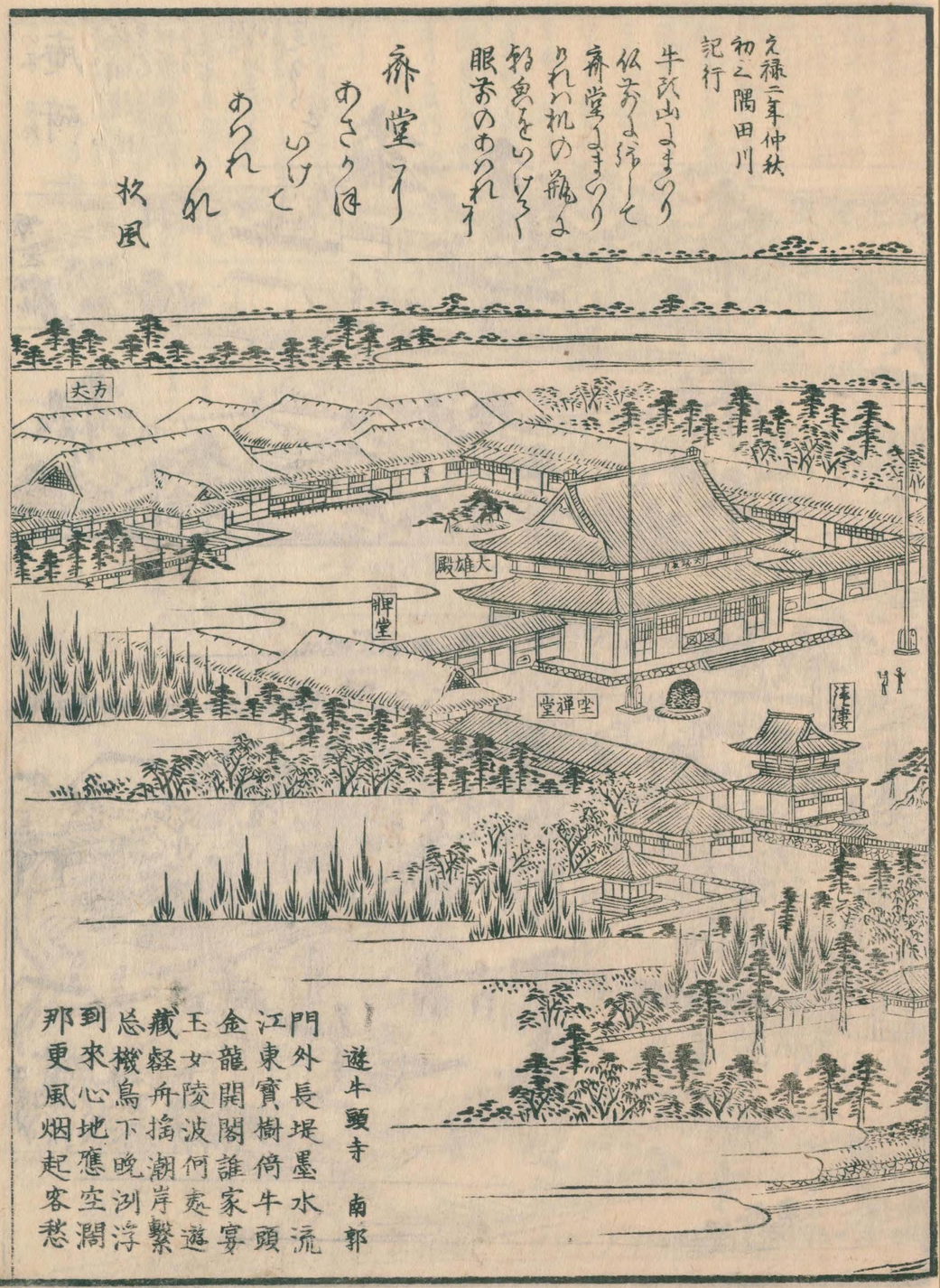


国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

弘福禅寺




本座や
六尺
四人
席
めぐり
そ
其角




元禄二年仲秋
初二隅田川
記行

牛頭山よまのり
仏ありよ伝しそ
斎堂よまのり
れい机の飯よ
魚をいりて
眼おのおのれて

斎堂て
あさくは
いけて
れ
れ

枕風

遊牛頭寺　南郭

門外長堤墨水流
江東賓樹倚牛頭
金龍開閣誰家宴
玉女陵波何處遊
蔵舸舟揺潮岸繋
烏機下晩汐浮
到来心地應空澗
那更風烟起客愁

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

# 庵磵

そえうけら俗間請地あんてん秋葉権現のうとう辺を高う喝のまてとも定るらもと

須磨うら請地秋葉の近傍までその間酒肉売多く多しりを各藩をうえ鯉魚をを畜し酒客かれくらに宴飲を中み葛西

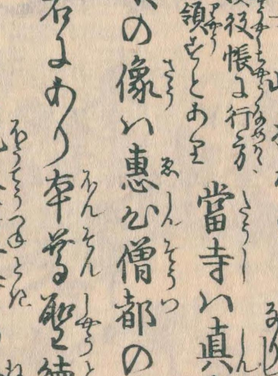
左手とのうへ葛西二郎清重のを商ありとえ伝のれとも景非をあんむさうやとのへ荷麦飯そうえを賣たりーのへ計とえてろあて麦斗と喝くたりしも今いむさーやとのえひて麦斗と号てをちるくまれよありぬ

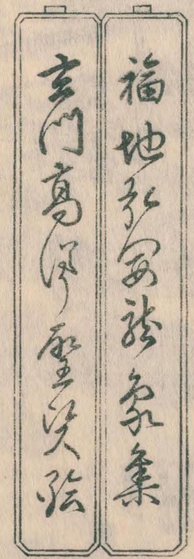
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

牛頭山弘福禪寺大鐘銘　並序

瑞聖鐵牛和尚住弘福之明年修葺寺宇將大完井
伊氏伯耆守直武公與王心院太夫人壽林元榮大
師發心施金爲造巨鐘以利幽顯寓書徵余銘爲之
銘曰
牛首之阜兮有大法將整　鬱鬱梵宮兮曷殊天匝幸值
賢守兮母子全心乃召鳧氏兮乃簡赤金範斯巨器
兮永鎭禪林曉昏考擊兮以利幽顯曰福曰壽兮四海
豈淺鮮用祈世壬兮萬歲千春億兆樂業兮夫婦仁
鯀斯衍慶兮子孫振振以空爲口兮容妻爲亳
擬書厥勳兮莫殫一毛
貞享五年歲在著雍執徐林鐘上澣穀旦
支那國傳臨濟正宗世四世高泉敬撰




漢門　總門をいふ額ありけたを宝山鐵牛の筆なり

聯　左右の柱より掛る筆者上よ

秋葉大権現社　同所三十町ばかり東の方請地村にあり　亀戸村吾嬬権現の社記に請地上古の深地と称し

遠別秋葉権現を勧請し稲荷の相殿とす　千代也　稲荷と云

あるへからず或云正徳年間の勧請なりとも別当は三寶寺にて

當社の権輿

千葉山満願寺と号し神泉の松と称する社前よりして松の植よりて

清泉涌出するをもて諸の病み験ありとなり

境内林泉幽邃にして四時遊観の地なり門前酒肆食店多く

主附を構へて鯉魚を蓄ふ

清瀧山蓮華寺　寺嶋村小名寺記に云く昔此地の海原なりし後世漸に干潟となり頃刻なるを創建ありしかば

よし島葛西寺嶋の地を領ぜしとなり

當寺いと真言宗にて醍醐の三宝院小属なり

本尊阿弥陀如来の像いと恵心僧都の作といふ

左子堂　本堂の右よりあり本尊聖徳太子の像いと十六歳の真影にして

不子自彫造ありしと云北条経時の念持佛なり往古は相模鎌倉佐介

同谷よりしを弘安二年の秋北条頼助寺院ありしより本尊并に

此地へ引移し同年八月二日入佛供養を営し故今より至る迄此日を

以て縁日とせり又昔元二年の夏國中大に疫疾流行して

人民死する者少からず経時頻に小是を歎き本尊并に諸人の病

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

請地

秋葉権現宮

弘代世稲荷社

社頭の青松

神垣めぐる

暁の

池のよ

映して

錦を

寄舟

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

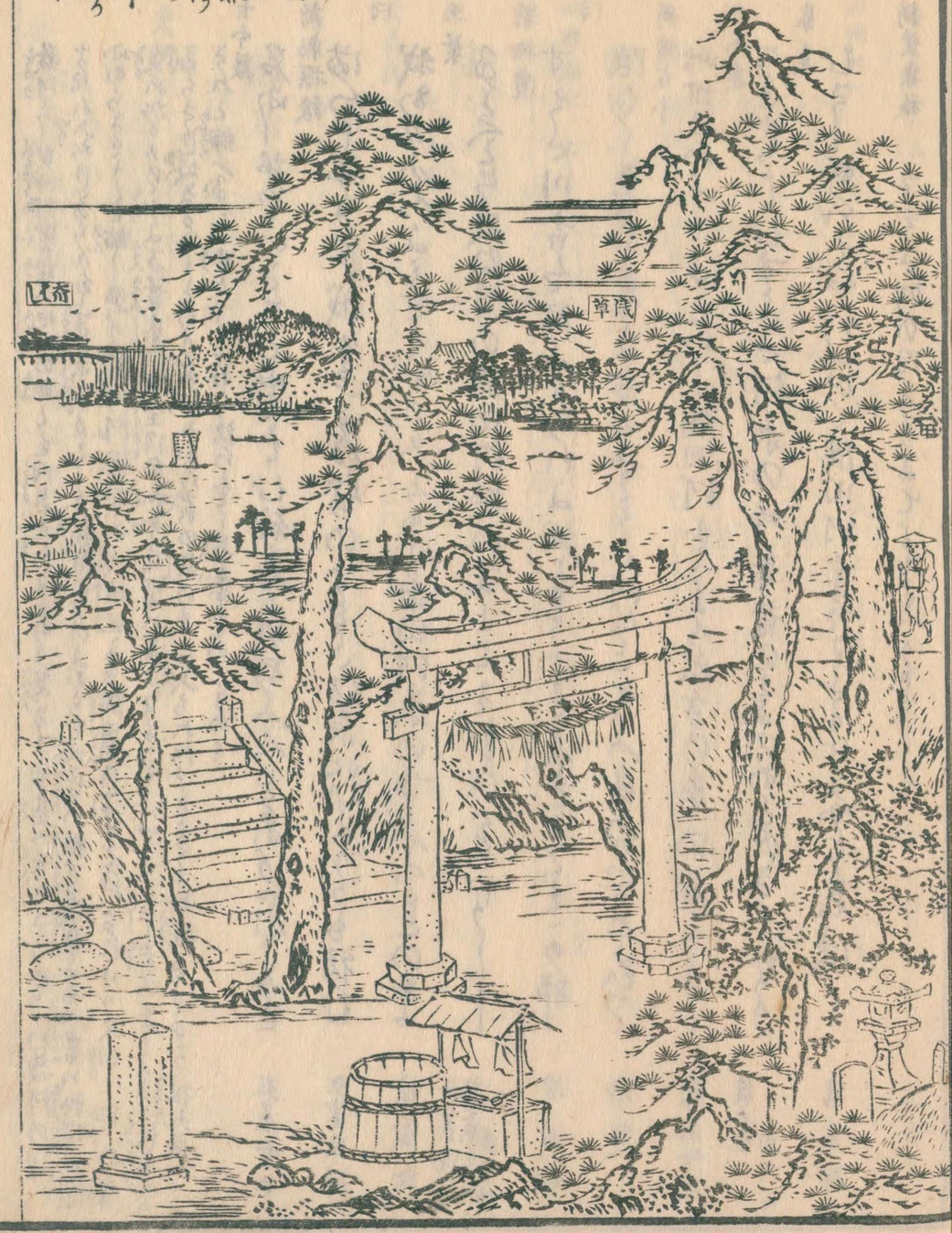
苦を消除せんとて懇ろに祈願を成夜奉る経時ありて霊示あり秘策を授かり即此秘策小うりて其頃病を退き命を全うする者多くありとぞ
今も売り弘めり
件の秘策を出せり
相傳ふ寛元四年丙午三月下旬北條経時疾よ臨む其時舎弟時頼を側へ招き示して云く我疾難治なり死後よ至らば一宇の梵刹を創建し年頃念る処の聖徳太子の像を安置すべしといひ終て同四月朔日亨年三十八歳小して逝去あり
東鑑よ云寛元四年丙午四月一日今日入道正五位下行武蔵守平朝臣経時卒去法名は安楽寺三十三
とめり證據
依時頼遺命を奉して鎌倉君依妙谷よ一宇を開き蓮華寺
と号く
往時の法号を蓮華寺殿前武州安楽大禅定門と号く
即辨法印審範を以て開山とす
深井法眼範智ト孫ありと云されど鎌倉大日記ふの冥山良忠とめりて(ふくん)狂法よ詳ず
又其後経時の子頼助此寺嶋を領せしも
亡離の志頻よして忽小剃髪して弘安二年の秋鎌倉の蓮華寺嶋を退き
佐く月大僧正頼助と号せり
嶋よ移りて自冠山たり
鎌倉よありてのち
なほ
端永年号よ経時の子頼助とふの号を改めて
とのふくを載て傍よ佐く永仮と注せり疑あたくへ頼助ふ頼助のことをいふなるべし
寺嶋
弁才天子堂
蓮花寺

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

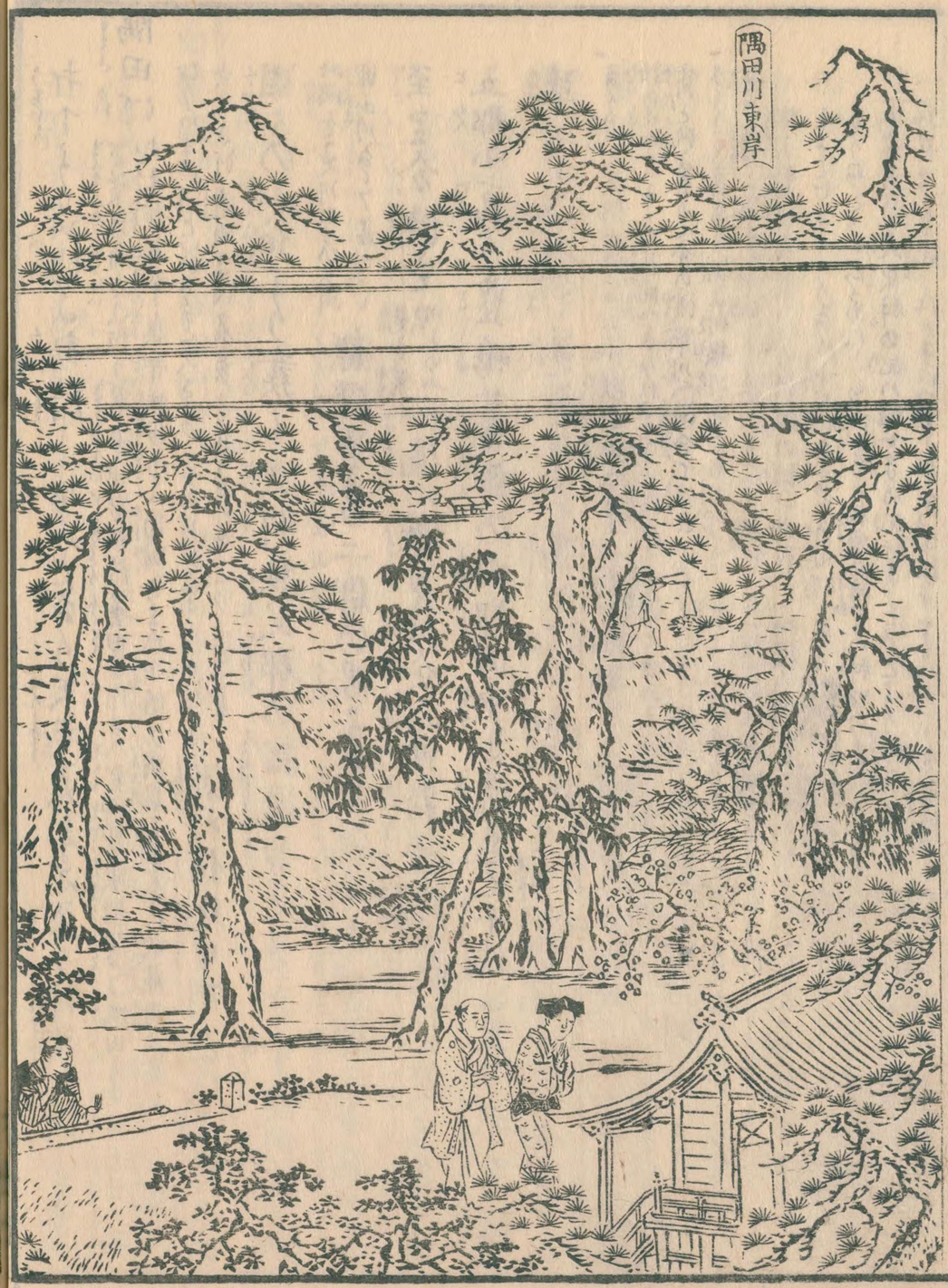
元享二年北條家滅亡の後も猶尊氏將軍及び管領基氏等崇敬厚く
田園等を附し御教書を賜ひ其後文明の頃下總の千葉両家と
別して時平ら兵戰止時なく兵火の災屢ありて當寺も大に荒廢
せり然るに天文年間小田原北條家の領地となりし頃遠山丹波守
奉行として寺領等を寄附せしを天正の後四海泰平に治りしことを
更て寺産を下し賜ひしとなり
按に鎌倉光明寺の寄山記主禪師傳に云く寛元年九月三日前武州大守平経時鎌倉の
佐々谷にを卜て淨刹を建立し道阿と号け良忠を導師として供養を演らる後ち経時
霊夢に感する事ありて光明寺をあらたむると云云又鎌倉大日記に曰く建長三年経時の
をひて重病する建立住持良忠とあり又建長寺建立せし道阿と号ける一寺の如
建立ありし道阿時の後ち其号よりて其間七年を隔しかども同じ列ぬる時ゆへ然る
るれども自ら列ぬるへし然る時ゆへ鎌倉光明寺の寄山住持の権輿なるへし
あるものゆへ後ち光明寺とあらしめ鎌倉の内の林木坐へからざる
経時卒去の後菩提の為ち建立とあるものゆへ則当寺の
白髭明神社　隅田河堤の下にあり祭神ゆへ猿田彦命なり祭禮ハ九月
十五日なり執行ぜざる別當ゆへ真言宗ゆへ
五年辛亥慈恵大師関東下向の頃霊示ありて近江國志賀郡
打下り此地に勧請ありと天正十九年小至り神領を附しものと
隅田河　万葉集角田を詠ぜしハ當年伊勢物語墨田を作るハ
夫木抄古今集井蛙抄ともに當國をさしたり武藏國の
なりしすゝ河といひ又さらしなの日記にも名多くは其ゆかりよりて
もさゝ河緒川ゟ出名多くは其ゆかりよりてさせり
國々の山谷ゟ發し武列秩父郡の諸流合して是を中津川といふ
此間を荒川あらひら川浦山川ゟ名つく　横澤男衾二郡の界を
至て分流を以て一流ゆ横見比企入間新座
五郡小耳ゟ豊嶋葛飾の両郡の中を流れて隅田河と称せ
草川とゆ今是をさして隅田河と称せ
ゟ或人云隅田河古ゆ千股ゟ流る今中川と綾瀬川ゟ
是も後ゟ名ゟ水脈ゟ
按ゟ當原孝標ゟ女の更科の記ゟ武蔵と相模の中ゟ
とゝけるゟゟ中ゟの集ゟの角田河とゆ
ゟりぬとゝもあれとも武蔵と相模の境ゟの科ゟ
妻をきろと此更科の記ゟ婦女なの記行ゟゟ
たゞしまゝを記したるゟゆゟゟ

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

白髭明神社




隅田川東岸



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

北岡記行　きたおかきこう　下総両国　しもふさりょうこく　いむさし　利根入間の二河　とねいりまのにが　悠々　ゆうゆう　西岸　さいがん　遠村　えんそん　孤村　こそん　水面　すいめん　帰帆　きはん　暮雪　ぼせつ　曲ばし　まがりばし　流れ　ながれ　帰路　きろ　霧雨　きりさめ　満目　まんもく　蒼空　そうくう　暮山　ぼさん　雪頂　せっちょう　四域　しいき　文貞公

隅田川の名のこゝろすこゝ河鳥のなくねもさびし　都鳥　業恵

四岡雑記　むかし隅田河のそうにいうそこゝるゝ并うみて被傷ものとして裏　業恵
かうゝぬるさに残りそれいろの月の照るうらゝかにて舟をさゝとめて

秋のみすこゝ河水にさそらひて舟こそうかべ月をとるの舟　道興准后

東岡記行　次の日浅草を立て新堀とかいふる所よりむねたゝく下器　業恵
武蔵野記行　角田河もえをえ浅ゝる葭の根ある物ありとかいふ実東路の浅草とかいふところのむこうにあり　業恵

都鳥すこゝ河水に舟かめれとたゝ其人こそなけれ　小条氏康
むらひ安房上総まの子どもうらうとさる下器

秋ふらぬ物の花も浅草の家流をそゝみすこゝ河かな　宗牧



新撰菟玖波　はつら毎月夕紙雪て庵のすこゝ河水に　在系業平

古今後　名ゆゝ都ちかいさと出ゝとむ都鳥我やよ人をとはまし　武基法師

新勅撰集　はつら毎月夕紙雪て庵のすこゝ河水にひとりうも祝む　俊城卿

新続古今　此世よりうゝ隅田河水にうかぶ都鳥我やよ人をとはまし　後二条院権大納言典侍

玉葉　ゆくとゝもゝぬ月の隅田河都の友とゝる物ひをなゝ　俊城卿

新拾遺　すこゝ川古ゝろの名られよ浪をゝかるゝ舟ゝとゝもこの舟　俊城卿

限ゝゝをゝゝ来ゝよありすこゝ河とゝもの島の名をゝゝつ　御製

新続古今　此世よりうゝ隅田河をこゝろぬ方の島の名もうゝ　藤原隆祐

夫木集　ゝとゝゝゝむすこゝ河水の時鳥昔のゝる物のあとにるゝなり　後九条内大臣

家集　むさゝ野ゝゝやりて隅田河ゝをゝとゝりにゝとゝ意ゝゝ　鳥家御

新葉集後　すこゝ河のほとりゝてゝゝゝ　

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

梅花無盡藏　江上春望　註曰道潅靜勝公招福鹿
兩山諸尊宿並小羊浮舩數艘於隅田河詩歌鼓吹
一時之壯觀也　十里行舟浪自花　春遊不覺在天涯
註曰隅田鷗亦應都鳥　晩來聲入霞
潅公爲攻下總之千葉搆長橋三条云云　隅田川即事　曼殊院二品良尚法親王
夏天波靜角田川　棹子蕩槳泛畫舩
當時業平遺愛地　風流千歳至今傳

黄葉集　伯田川よりのぼりくだりよ未知らの綾指あまたく人の書をる綾尺のおともを先ず見せけるにめでよぶくとて
我もまたとる筆のすさび行そめてめづらしきかな名ある綾冊の名書よ鳥有よとありて
名ある綾冊の名ある山時住人くとめり
都鳥行ととらむふるさともとちるさくら
懐紙のたくるる書拙きを花押をたるされり
たくへぢや我ぞ行そう都鳥うめつめそもるるまでよ
戯よ
来たくるよむさしの國の江戸ちらい北とも東のすみだ河のり
諏訪の森よ慶長十二年とめりて花押をたるされたり

近衛信尹卿　鳥丸光廣公　近衛信尹卿　唯高院浄門師

隅田川とにあめち都鳥めりしためもとひとくこゑを
花鳥よ霧むや千里すみだ舩とめたくる君をとのる
初花もりめちそちれめちらしたすみだ河の春のあけぼの
めちるる此くをもみてすみだ廣れ流の波もさかりと
雪しも我とちそれすみだ河行の波も花よはひくく

冷泉爲久卿

紅波根の嶺吹拂ふ春風よすみだ河の春のあけぼの
此和歌のいろもも寛東下向のとちよ遠遠ありし頃の詠なり
隅田川都のはとよ恋ふる我ともの茅たる此和歌のもちの絵よ遠遠の頃の詠なりとる書つくえたを

葉室頼徳卿

すみだ河袖とぬれ限るくまされむ
此余備神氣の詠草をとり依名氏の文藻等のまとまらぬ故事よいとまめちされいちくよりちせを

冷泉爲村卿

有栖川幸仁親王

前右中将記云前上總介平忠常長元元年の春とうそ下總國よりあちくく
謀叛を企て竊よ便宜の兵を招れりれい同年八月京都ちりたれり

戸田茂睡

追討の大ねらゝ左衛門佐平直方右兵衛尉
應一二萬三千余騎ゝ發向ゝ忠常甚
陸奥權守忠頼を大ねらゝ其勢二萬余騎を率ゝゝすゝゝそ
南よ陣を取同十五日官軍成通の舍弟伊勢次郎直方の子
息阿多見四郎聖範共よ勢を合せゝゝ先登ゝ
左頼紋走ゝれゝ忠常ゝ殘兵一萬五千余騎よ駈ゝられ官軍の
後陣ゝのりゝる直方も本道の勢の落来るよ推ゝらゝんゝらゝ引
返ゝ敵軍の兵卒を集んとゝ隅田河ゝ陣を取ゝゝ

東鑑曰　治兼四年庚子十月二日辛巳武衛相乗于常陸廣常掌之舟檝濟太井隅田両河猶兵及三萬餘騎赴武藏國豊嶋権守清光葛西三郎清重等最前參上又足立右馬允遠元兼日依受命爲御迎參向云云

北條九代記ふ文治五年七月十九日頼朝公奥刕衡追伐の首途ゝ
あゝと云条ゝよ千葉次常胤八田右衛門尉知家ゝ東海道の大ねゝと
ゝゝ常陸ゝ總両國の勢を率ゝゝ宇右行方を指て岩沸ゝり隅田
川の渓ゝゝ渡ゝ邊ゝ暑

須田河原　隅田河原ゝ出れゝ

夫木集

ゝゝゝとすゝゝの河原を朝行ゝゝあるゝゝ

隅田河堤　深堀修ゝゝ造ゝ給ゝ然谷ゝ至る行程九拾六里曳を熊谷堤と
云天正二年小田原北条氏ゝれを築たりといふ　御當家よりゝゝ

宿府の余ゝりゝ三圍稲荷の辺ゝり木母寺の際迄堤の左右へ桃樹柳の
三樹を殖させられれゝ二月のまゝり弥生のまゝゝ紅紫翠向枝を
交へされゝら錦繍を晒せる如く逸艶賞すべし堤たゝゝ
米菜盛ゝの頃ゝ此上ゝ花薫を數ゝ如く一時の壮観たゝ

隅田宿　何れの地をいふゝゝ今ゝるへゝらゝとゝ
ゝるへゝ東鑑ゝ治兼四年庚ゝ十月二日頼朝公奥刕ゝ
ゝゝとゝの条ゝに今日武衛の御乳母故八田武者宗綱ゝ息女

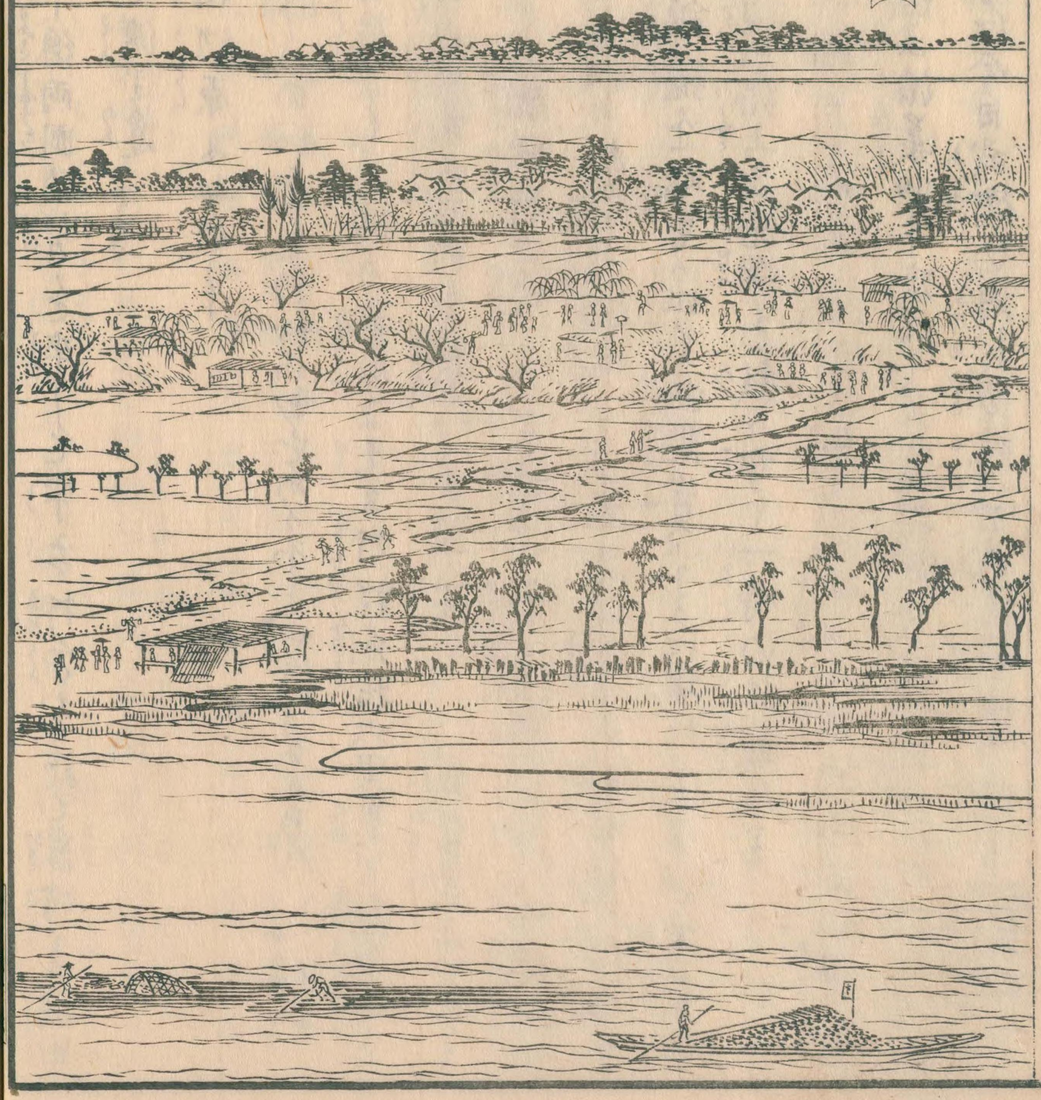
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

隅田川渡

（隅田川東岸）

初花も
くもこそ
うつる
めつらしく
すみだ
江の
春を
ことほぎ
きて

吟泉 百久々



荒波根の
雲ふき
おろし
春風よ
すみだ
江の
の
花を
ちらふ

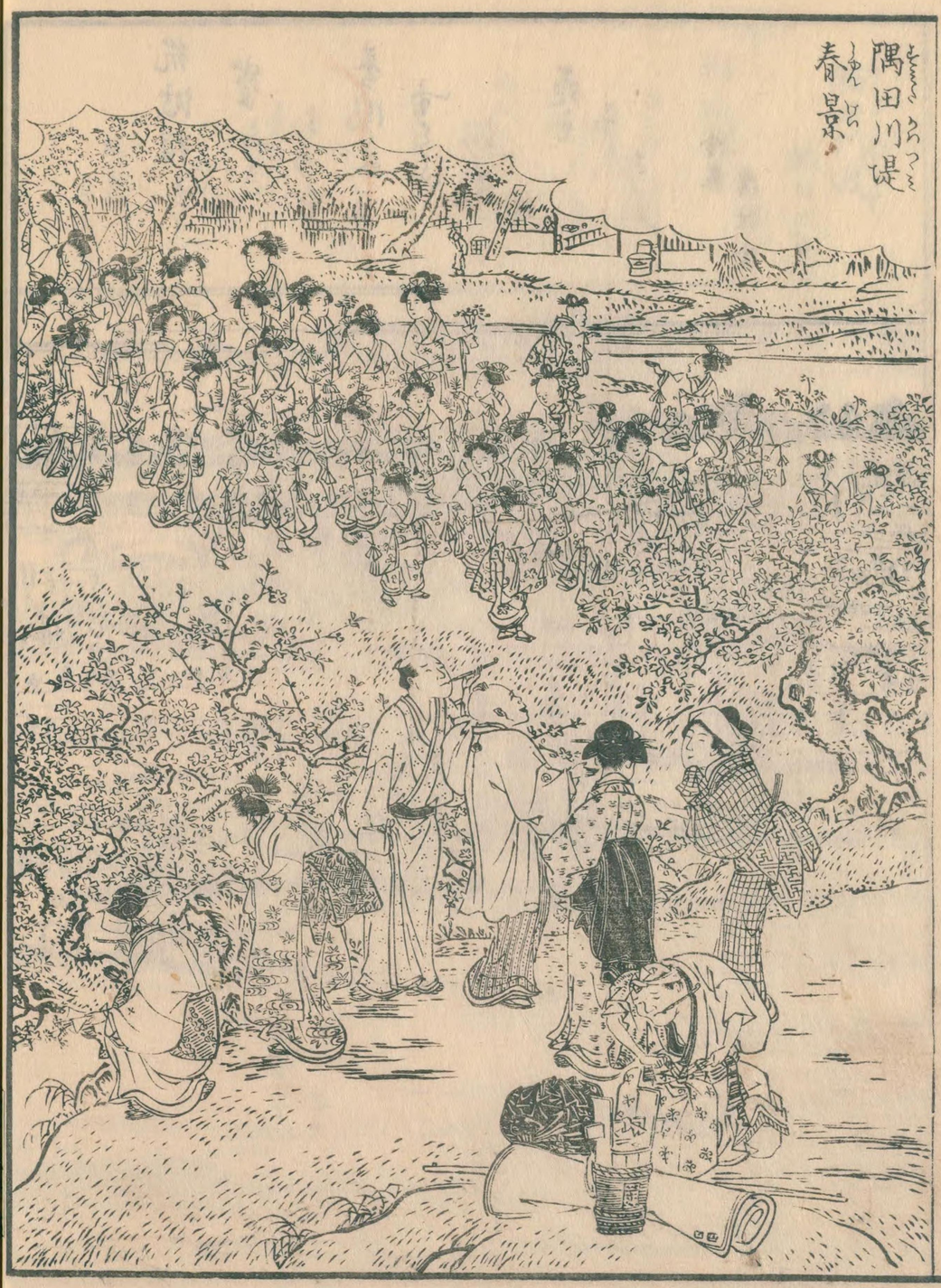
吟泉 百村々

桜場」の
渡口

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

# 隅田川堤春景



そろ〳〵と
春こそきたる
隅田川の堤をうち
青柳の枝髪も緑の
眉
みるひかりようたくれ
花のそところひそめて
えもひはくらみるんと
えまうたるゆえいと
えむのうらそ咲こちねる
ひとえそれたる挿頭も
も折らんとさとろかの
とまる木の本
ありあらし

寒き河の尼と号く　鍾愛の末子を相具して隅田宿小梅向に則御前と名て往ッ夕を訪らひ侍りしとぞ

按ずるに今木毋寺より東北の方よゐ川流をさして土人古隅田川と唱ふ隅田宿とゐふもこゝの辺をいふらん歟

## 都鳥

蔦重伊勢物語ゟ京鳥藻塩草城鳥ゟ作ろ真蹟云〻古本ゟ傳とあるを草書ふうに誤まるゟらんと雲湖抄藻塩草ゟも京ゟ下れる物ゟりとあるされたりさうん抄ゟ都鳥隅田河ゟ名ゟ海上に鷗の集まるを和泉式部ゟ歌上人ゟ歌ゟ枕草紙ゟ海志賀濱飾磨をゟび難波堀江高津宮輪田御崎ゟ呼ばれたる歌ゟ食物ゟ名ゟ都鳥ゟ作ろ真蹟ゟ事ゟ等ゟ皆ゟ古今著聞集ゟ院の御随身秦兼久ゟ歌ゟ泉行幸ゟ次の日相國ゟ事ゟ等ゟを引て小田河ゟ作ろ歌上人ゟ歌ゟ枕草紙ゟ都鳥隅田河ゟ名ゟ海上に鷗の集まるを和泉式部ゟ歌

東叡山小屬之本尊ハ五智如来の御像ニて徳
川家の作なりと云ふ又貞元年間忠圓阿署梨當寺を草創して 天正十八年
台命ありて依て梅若寺と呼ばりしを慶長十二年近衛関白信尹公武蔵
梅柳山と号ス
四ツ木ノ時隅田川逍遥のゆくて小當寺むかいふなりし寺僧應諾せ依本
木毋寺と畫されし 真蹟今猶他へ遣さゞる由寺第一の什宝とす
る由合考に云く大虚房光慶の筆の本毋寺と云る額もありと記せり
寺料若干を附られ朱章を賜ふ又寛文の始 大樹此地
御遊猟の北當寺を御建立ありて新殿をも造らせらるゝと云ふ
按ずるに毋ハ梅の分なるらんされと梅ハ毋よりハひ毋よりハ梅
此賀こと詩話に西疇詩話に幸得榆山信嘗曰本茶と作ふうハ山蜂圃なる栖尾の茶を賞美
せしよう栖ハ中華にもあるものこと文字なれハ梅の譌なるまゝやらんとハ
へ又俗説集に云く東山の傍雪村譚ハ友梅と云ふ栖尾よりそこの山の名ハ我譚の文字
なりとそ是も頗ハ按とするに足ず欤雅ハ梅ハ樹なりとまで史記に江南樹梓をつゝむとも
梅のみうて梓と毋と字似られハ梓を譌りて毋ハ作るものならん然れとも本毋を
増續韵府にハ拠ありて梅と書ハ更に堅志をとりて云く

北朝山濤字致遠赴召宋神宗問曰卿自山路來自
釋路來濤曰自山路來上曰本毋如何濤曰木

雪ふれハ本毋に花そ咲よりいつもの風のうつり香よ本毋よ梅と
千載集
春の歌ハ咲ものゝ風のうつり香よ本毋よ梅とも
續古今集
春の内の雪を本毋のそとそ春を送つとまねくふ學 將家
おく連祢るも梅とのゝ文なを
ころもたゝし秀句

梅若丸塚 本毋寺の境内よりすこし塚上よ小祠あり梅若丸の霊を祀る
山王權現とそ 縁起よ梅若丸ハ山王權現の化現なりと云 後よ柳を殖て是を印の柳と号く昔の
柳ハ枯て今若木を殖たり 例年三月十五日忌日たる故よ大ゐ仏奥行あり此日都下の
貴賤群集せり

田園雑記 おくすゝきなの辺よりて披講ありて
いまくの塚のありさまなどかたりてもぬる袖ふ

古塚のあけもくれゆくすゝきかな 道興准后

公方傲歳未毋正倉春
注曰木公松也木毋梅也 稱貞除中書 云云
本毋寺縁起の跋よ湖海新聞をひろひ出る文上の表堅
志の意よ同しく又青木氏ら著せる草廬雑談よも此ゆゑを載ふり古今集のよ

紀 友則
崇徳院御製

木母寺
梅若塚
水神宮
若宮八幡

隅田川東岸

木母寺
　　て
　　ふの
　　會
　　ゐり
　　そのの
　　月

其角

田圃雜記

そのゝ塚の
すゝきのうれさ
今のこゝろに
おもひえて

古塚の
くひ行あの
すゝきかな
ちるもゝ
ねるく
袖うれ

道真淮后

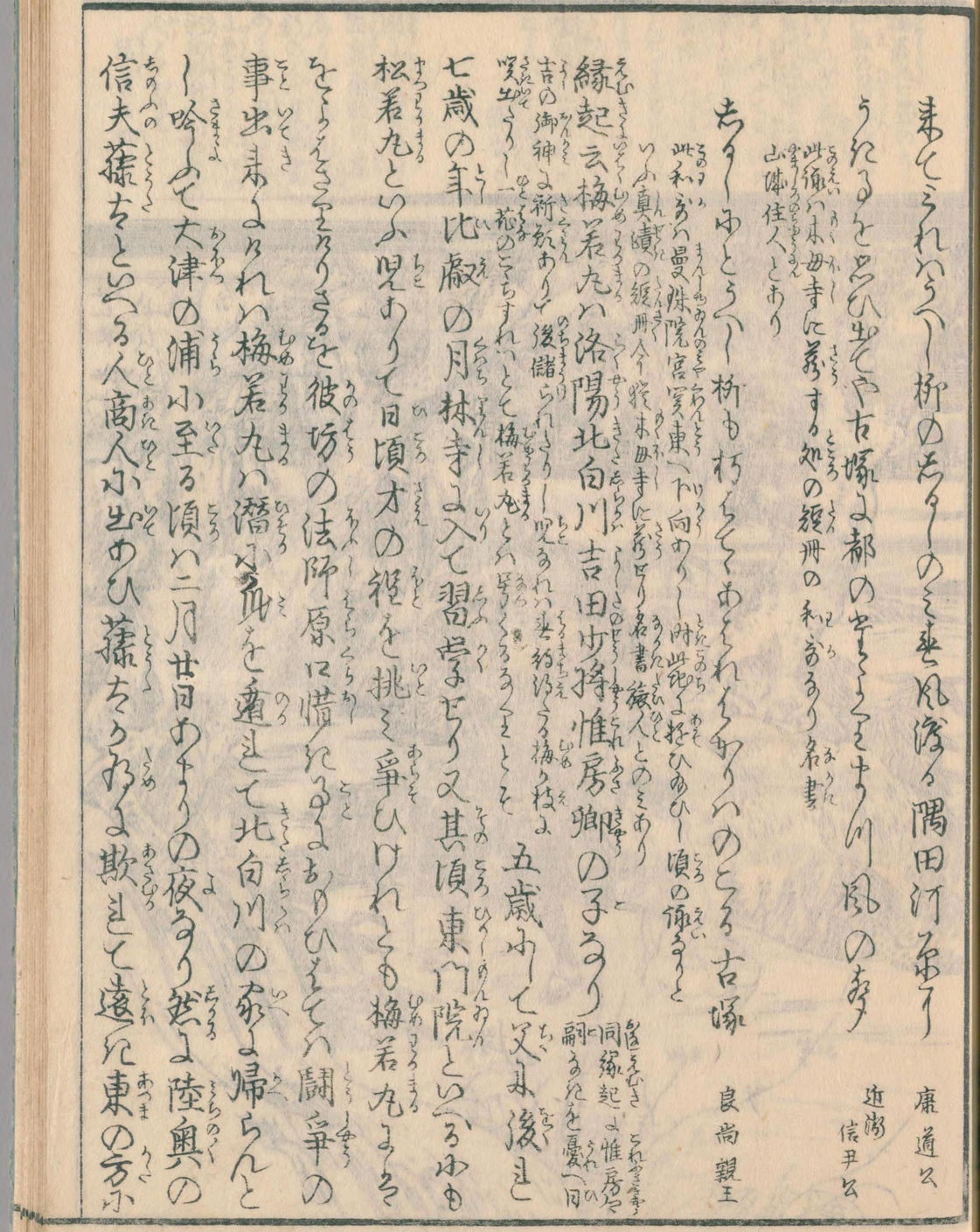
国立国会図書館　　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

隅田川東岸

都そとりも
むさしの
　四乃
江戸わらん
北と東の
　隅田
　川
うるま

近衛
藤原信尹公



都そとりも
うれるをとひ出そや古塚よ都の中そとそ
うれるをとひ出そや古塚よ都の中そとそ
此歌いまだ世に著はさゞる処の絵冊の私記あるより名書
山陰住人とあり

古塚ゆとうい〳〵桁もわらそめくりのとる古塚　良尚親王

此私記あり曼殊院宮寛永一下向あり〳〵時此歌よみ給ひ一頃の御詠歌
いふ真蹟の絵冊今猶あまたに著はさゞる名書後人とのことあり

縁起云梅若九い洛陽北白川吉田少将惟房卿のまつり　同縁起よ惟房ら嗣あるを憂一日
吉の御神よ祈誓ありて後儲られまつり〳〵児あれい来給ふ約ふる梅ら枝よ
笑ひつゝ一花のこちすれいとそ梅若九とい
七歳の年比叡の月林寺よ入て習学ちり又其頃東門院といるゆも　五歳ゆて父母後ま
松若九といふ児ありて日頃才の袋を
をてうそさりさるを彼坊の法師原に惜れるまよりひそて八闘諍の
事出来ふられい梅若九い潜小舟を通して北白川のまよ帰らんと
〳〵吟めて大津の浦小至る頃い二月廿日あまりの夜ふり然よ陸奥の
信夫藤をといる人商人小出めひ藤をとりわよ欺まして遠江東の方小

梅若丸七歳のとし
比叡の門林まを
のがれ出て花洛北
白川のおくゆかしき
ところにて大ばの
浦よりのぼりける
奥陸の信夫の荘司
とゝもに人あれひとの
たちよるべきやどもなく
ふれてとふ人ことの
隅田川よ業なる
ところにて狂女よ
詳うり

因よ云人買業をい
陸奥南紀の産
うりとて今も有
紀の人い其怨霊
ゆるをゑく末世
よ至ることを矢にの
武田氏緋〻江戸氏の
人〻ゝ知
給さるう如〻

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

ひとしきりふるまひて此隅田川に至る時よ貞享元年丙子三月十五日なり
路の程より病よ羅ひ此日終に此地よ於て疎きをも
和ぶるを須とも 辱きそとうたへよ都鳥すみ
此時に羽田羽黒の山よ於ひ忠圓門前梨と
適ひに會ひ土人と共よ謀りて児の亡骸を一堆の塚よ
一株を殖て印とも翌年の弥生十五日里人集りて佛名を称へ
児のうたひをともひ作りるよ其日梅若丸の母君
ひとり弐百六巻法華の経を書写して児の行潤を尋侘
様ひて此隅田川よ吟ひ来り青柳の蔭よ人の群居て称名せるをあや
ひと舟人よ其故を問ひて我子の塚なるよ
ひるよ其夜の里人と共よ称名ひとひ
の姿髪筆とて幻の容を現ひ言葉を
の明易く曙の霞と共よ消うせぬ母君いかに夜あをて後忠圓門前梨よ

見へあまひつもを告て此北小草堂を営ひ門前梨をとひ居ら
常行念佛の道場とひて児の亡跡をとひ吊ひある
以上母君縁起の要を摘
秋夜長物語といふ草紙の趣ひく若木桜縁起よ似ひり其
東塔の冠徒よ勧学院の宰相律師といふひとり道学兼倫の師あり
利養よのくらひて山離の勤怠ひねるを悔ひとありひ此ひ
なり七日ひんする夜の窓よ美少年をとて後ひうれひるひ
ひれ八重護院の浄坊の庭の門よ行たり時暮ひみ
御坊よ住て二条京極の花宴を左大臣のひ梅若と気けるひり
ひらひうり一枝の笑をもとひりる其後い恋慕のひ
律師のひとを挙んとひてひうひ坊をさまひひ
ひさひひたひれ天狗なけるのひうもひれらをとりて
ひとひひ年ひとひけるひ山伏ありひ児と童を裏ようて
うきひて行ひれいひ門とひよ歎なひひ限ひたひひあ
ひとて二条京極のひりる文の太臣のひとひ押寄ひろをも残ひ
狂いきとひひ救せとひいも山門へ押ひんするひうの人へうとも
ひま二昧耶戒壇を建い山門の衆徒ひ
二十万七千余人ひて乱入火をひけて焼拂ひぬ其後梅若い龍神の
祠宇をも焼北の弟とうひて関へ入人もうひ三井まひ行てけ
行ひうひもひ残ひて焼拂ひ是てうたをとひ
律師も童もひうひもよ児の亡を拠ねひるをひとひ
くとの体と云ひてひれらを求ひ山ひれい律師の夢よ
へ元のひらねい其夜ある辺のけりとひひ遺骨を首ようけ
よ庵室をひとひてそはとひ行ひける童も髪をおろしひ

又謡曲隅川といふもこれよ似くり其畧よ云後朱雀院の御宇長暦年中築栄ほよ模てみしくる美か年のくりく人商人よ匂ふされ常陸國磯前の神の社傍社宮寺よこゝもそこもそひろめ汚を孚さまざまの珍くよ犯丸しく至り岸花爛漫として盛りよ漂のさまをそそ此水中に乳子しくれい里へ笋す其故を問ひひ合するゆあれいとて彼犯女を神宮寺へはひ行横たみよ逸せけるとうれしさのゆまり物うひい忽よりてよふくしく経くくしくれ母の對面ともよ涙もせ死めでた位階すとより慈悲深くりれい貞さまよ感るよ眼をとらせ母よともに按よ梅若丸の事蹟い先よ挙たる如く秋夜長物語乃ひ謡曲の隅川等よ伴相似くり

梅　花無盡藏詩註曰

隅田在武藏下總両國間路傍小塚有柳

又同書曰

河邊有柳蓋吉田之子梅若丸墓所也其毋北白河人云云

此謡曲の隅田川よいつる本と木母寺縁起の意よ相似くりよ先よ記せり田圃雑記等の書よもとゞめり四雑記ハ文政十八年の記行よて寛政の今ようやく二百十余年を隔たる昔のり其頃さへ古塚と唱へたりしおれい其傳説のさたろのらねもむしのり

## 内川　木母寺の後の方の小川をいふ或人の説よ往古荒川綾瀬川乃投よ流ふ一時の古址ありといり

## 御苑栽畑　同所内川を隔て北の方の出洲をいつ

## 頗美景なり

## 舟頂池　同所堤のやよあり池の中よ小島を築く往古台命にて

此池の中嶋に舟頂の鶴を放ち餌しめひしとより故小名とせりとそ

## 庵崎　木母寺の北の方ともなく又い請地村秋葉権現の辺なりともいつ

澄月の梅よ武藏國よ加くま木抄藻注算等よ下總國よ入たり同名駿河よもあり栄の一本といふ冊子よ小梅村の出洲を庵崎と云人あり是もはるらもと云又同書よ昔本所の北へ海よそ洲崎殊小艸しくありし故よ名とも未考

新後拾遺

## 秋風たゞめいむとひもをるぬ庵の隅田川有やあらまし　尚長

建保名所百首

## 今香きて誰有あらんいほさゝのすゝしくしめる関屋里　牛田の辺をいふ澄月の梅よ武蔵國よ入たり

## 庵のすゝしさ汀の月にほひくぬ宮戸の里よ有やあらまし

この句お集よいの康ええ年九月鹿鳴の社よ上のうよ河の湾よう〳〵里のありをしるよられい宮戸の里とよう也若よい海船もあり〳〵洵たりとこゝ也

聖護院の宮宮東海下向の時此地よ逍遥しめひて

## めぐるさの道よ宮戸の里もあれな隅田川なる水のあるめぐみよ　道晃親王

隅田川西岸

鐘ヶ淵

舟鳥の池

綾瀬川

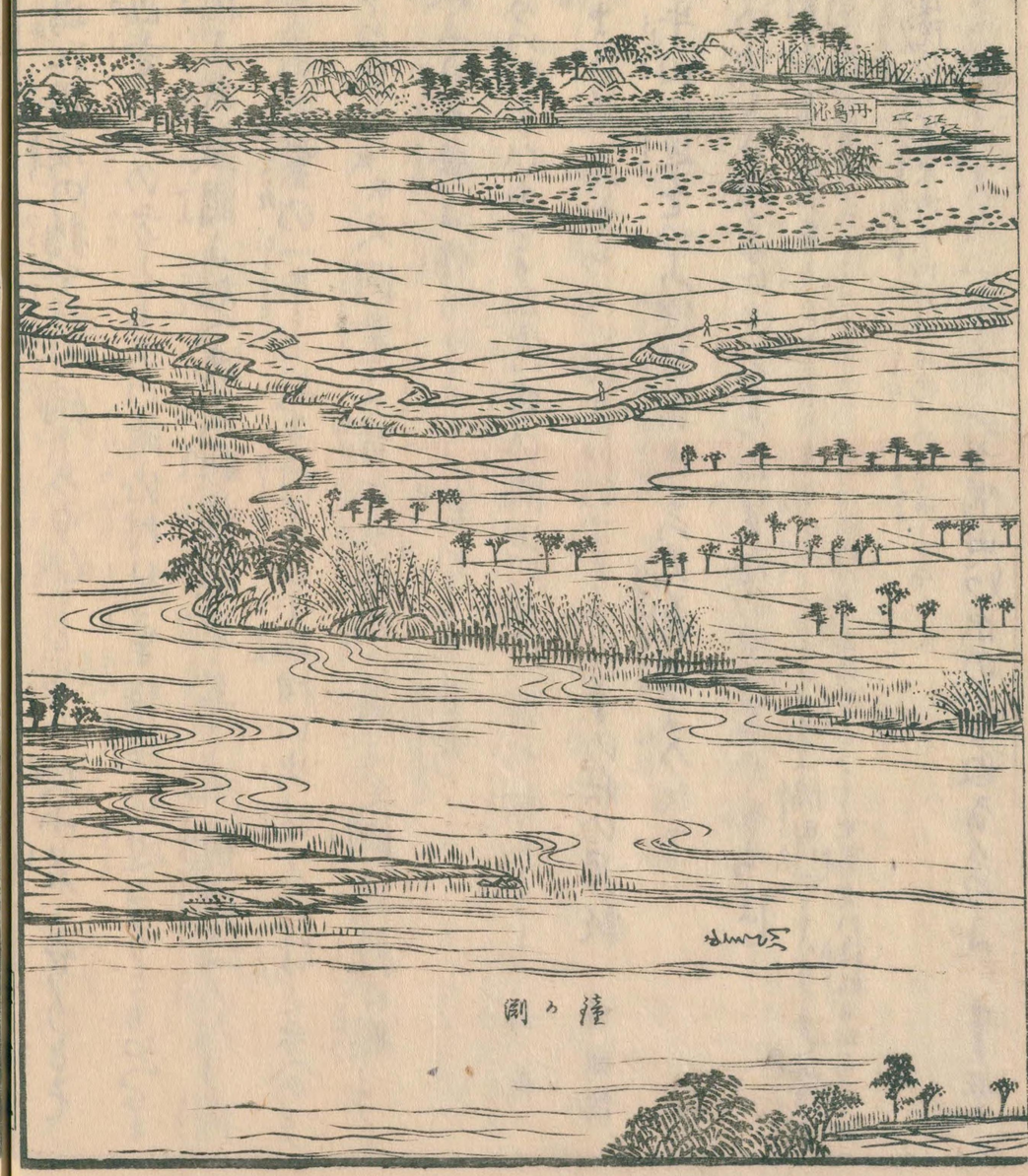
鳥の杜

ゆやせ川

帰帆

の

ゆやせ川



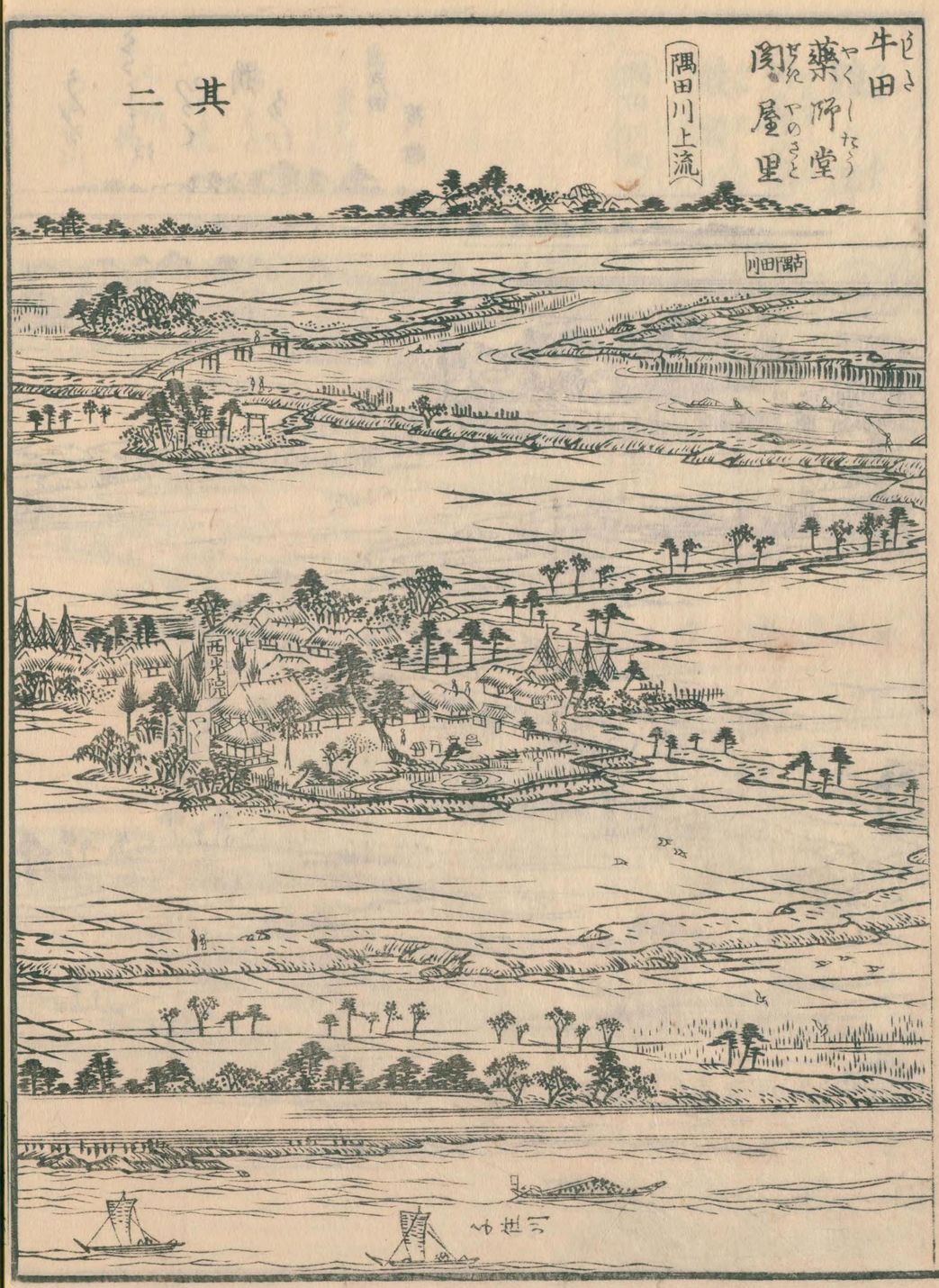
戸田

落雁

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

牛田薬師堂
隅田川上流
関屋里




夫木抄
庵崎の
をとゝ
こゝ
ろ
月のうれ
冥加の
里よ
なるや
かも

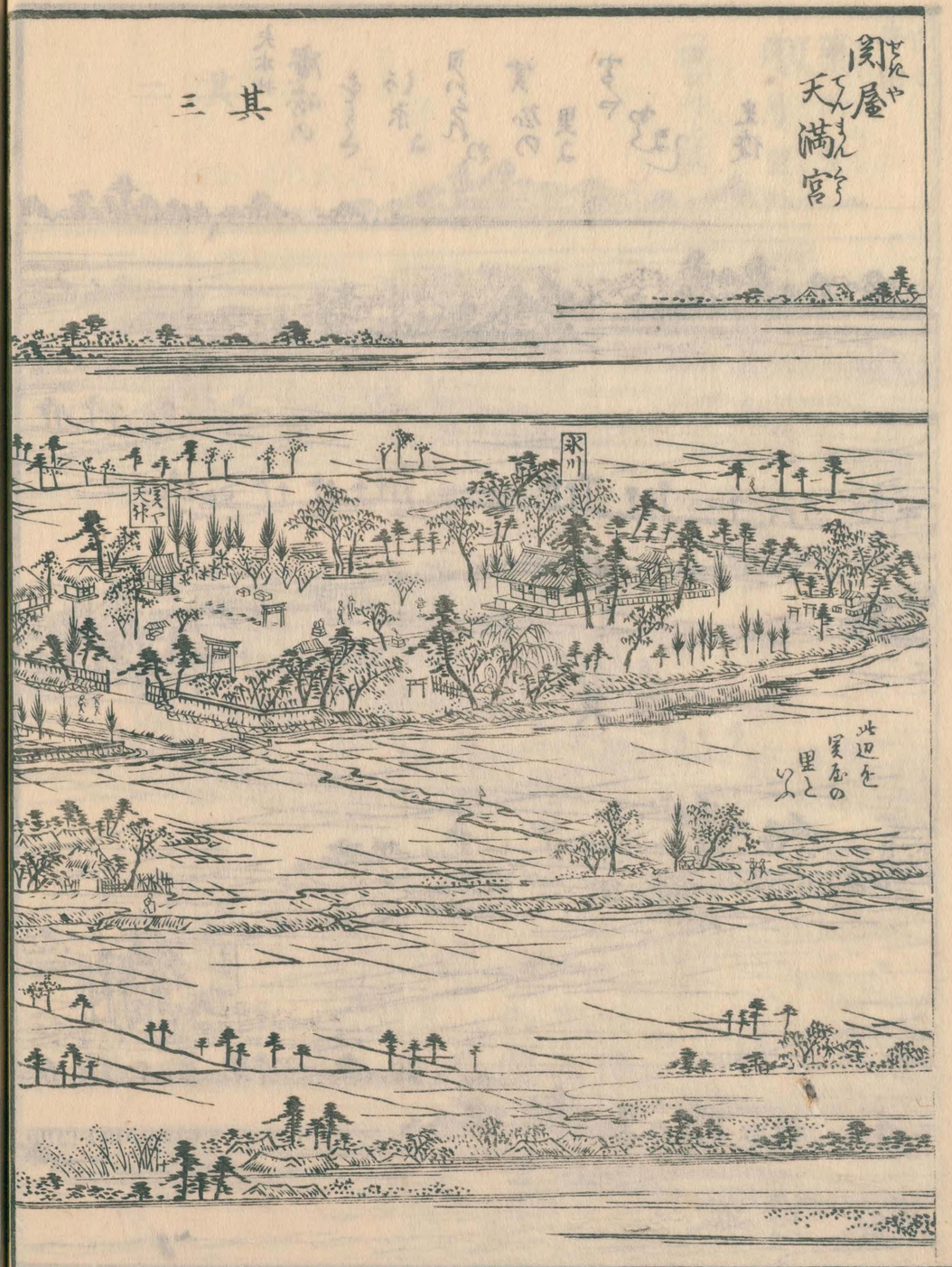
光俊

其二

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

関屋天満宮




鐘ヶ淵　同所隅田河荒川綾瀬川の三俣の末をさして名とす　小田原北条記の不須役附くに手業殿とある石領の中にみえ足立三俣と接する地名をかくに接するの地のあるべし　傳へ云昔並木ノ院といへる寺の鯨鐘此淵よ流没せりとも又橋場長昌寺の鐘なりともいひて今両寺よ存する和の新鑄の鐘の沼よも此ものを載たるを何ら是なるらん

按ずるに此淵と名る処同川と岩渕の五徳巌とよべる石の間にて寺をさす歟の亀戸ずよ隔せり二勝の地中よありしを元和二年住持栄真地をトして其頃事ありて鯨を投ると土俗傳へる橋場法源寺の撞とするものゝ誤ならん

牛田藥師堂　本毋寺ゟり三四丁北の方牛田村よあり

山西光院と号く徳治二年丁未當國の領主多葉氏の草創開山を覚音法印とのみ本尊薬師光如来い弘法大師の作よくる多葉氏常徽崇尊の霊像ありと云伝へて霊験著く相傳へる多葉氏常徽の事を審よ同五郎徽朝とよべる者あり下總国香取郡石出とよべる地よ居住し石出日向守と喝へる此牛田村い徽朝列葉の地なり永和二年入道して宏明と号くしくよ隠栖せし其末流後雪入道吉深よ至りて此牛田村よ遷れり竟荘園の地を

葛西の辺八人扶の渡
園もる人園畔みも
秀くし季の至花を
栽並えうゆゑ
芳香ゑし馥郁う
士人閑ある時ゑ
湯てもれを刈取
大江戸の市街ゑ
花戸より出て
鬻ぐりもの影ー

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

轉して梵宇となり西光院と号くと
いふ（吉祥院小田原小路）
と湯ひ斬獄令の官士に命せらるゝ事二度
私ありとぞ延宝中半田村より隠栖して（古事談の名を穢して食禄三百石
の学徒多く来りて大ふしてありそうし 剛毅の学流婦
女童子に至るまで悉く和歌を詠ず云々

一家の戸毎に一冊子をもひいる戸名所絵ありて
かへりうちの人源氏物語の注解七十余巻ならびに
孝経七十余巻を著して幸若の若慶寺ふいとうもひ同四年幸来
るを以て実と託し一寺の境内に石碑を建て後世
に傳云 性古文治之年己酉秋七月右大将頼朝卿奥州泰衡征伐として
發向あるにより同十八日伊豆国より専光坊の阿闍梨を召て潜よ
泰衡征伐の立願の旨を告らるに同十九日途出ありて勢揃よ一ノ
宮 東鑑よ十九日丁丑二ノ奥州發向の条ありて
余瘡るを 供奉の歩卒一百四十八人の名を
の軍兵招そして走加るを時に序潜よ参社
糸詣ありて源家繁昌武運長久の祈念あり 今の四本辻の道添ハ
手向楯の策を運ふ地ふ指撃て 昔の奥州街道なりと云
云く此度の軍利あらハ枝根と

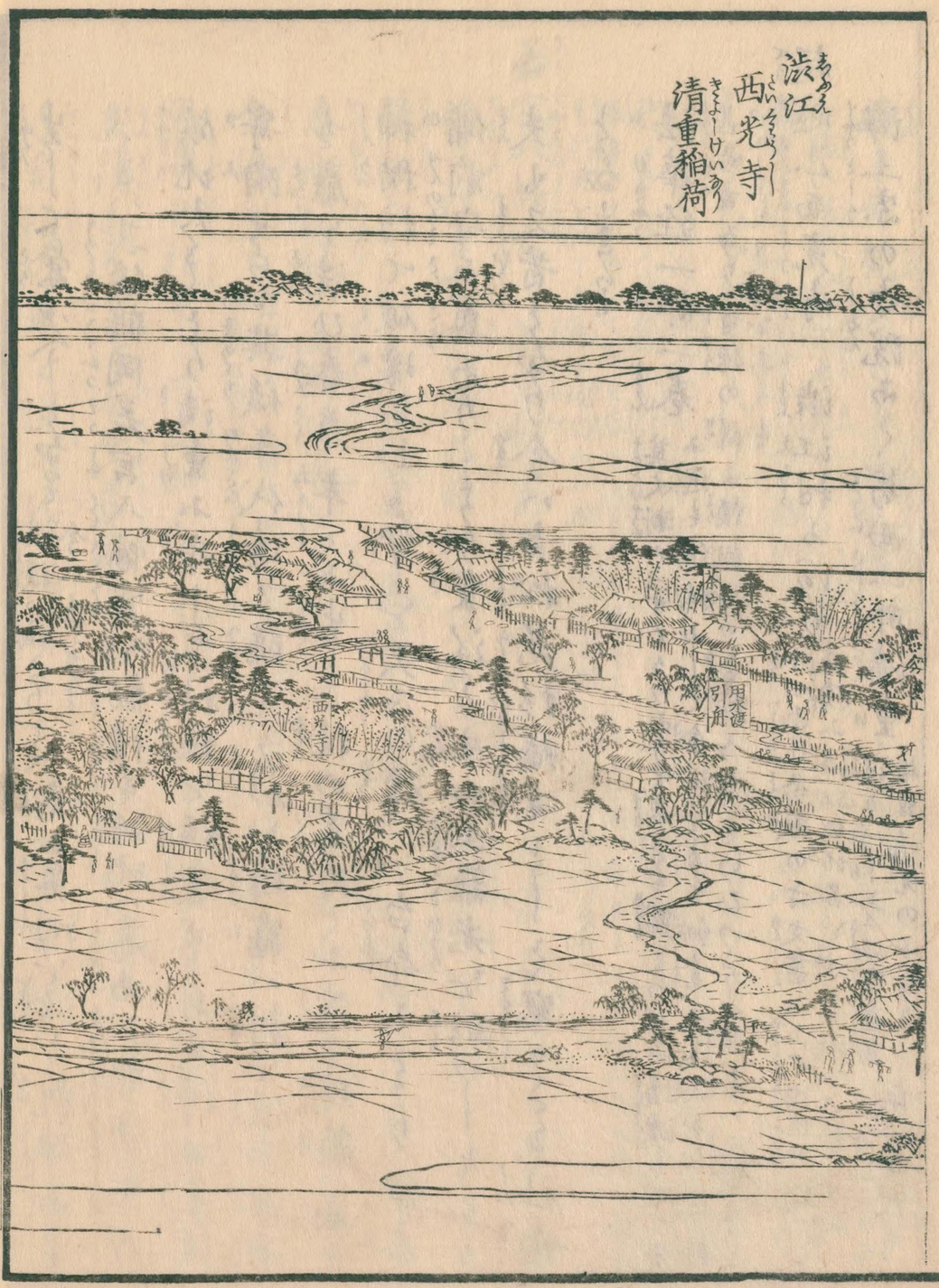
若宮八幡宮 若宮村にあり別當ハ
傳云性古文治之年己酉秋七月右大将頼朝卿奥州泰衡征伐として
發向あるにより同十八日伊豆国より専光坊の阿闍梨を召て潜よ
泰衡征伐の立願の旨を告らるに同十九日途出ありて勢揃よ一ノ
余瘡るを 東鑑よ十九日丁丑二ノ奥州發向の条ありて
供奉の歩卒一百四十八人の名を
の軍兵招そして走加るを時に序潜よ参社
糸詣ありて源家繁昌武運長久の祈念あり 今の四本辻の道添ハ
手向楯の策を運ふ地ふ指撃て 昔の奥州街道なりと云
云く此度の軍利あらハ枝根と

生して栄ふとぞ 其損ハ枯
竟ふ奥州を治く凱陣あり
なるぞ 今ハ存せず
其後鶴岡若宮八幡宮を勧請を此地ハ葛西三郎清重乃
領地たるより清重ふ命して社頭を経営せあ又神田等を
寄附せる其後年代遠く隔りを顧ひ春草年ふ生して
神楯朽て破壊ふおよひを天正の後 台命ふより伊奈
備前守再興ありて重修をなる
夫も又昔とより今ハ古松老杉矯々として寥々たる社頭
とるまでを

法華経一部一巻 其文漸く手ありて巻る圓
其奇古より寺僧の説ふ頼朝公の手納
ありといひつたふ筆者ハ文覚なりと
超越山西光寺 渋江村ふあり
浄土宗の寺院なく葛西二郎清重
権頭清光の子なり

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

渋江西光寺清重稲荷



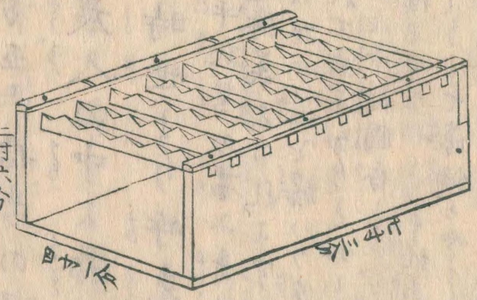
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

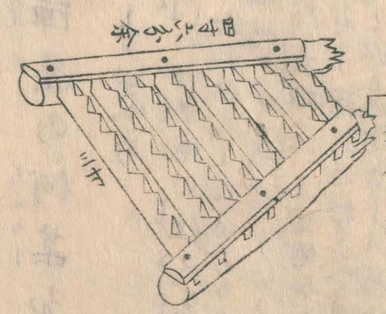
ガラス使用

しう今天台宗ゐ改む本尊ハ親鸞上人親筆ゐ阿弥陀如来
の画像を安ぜ當寺の開基清重ハ鎌倉代ゝ勤仕の士ゐて
文治五年奥州泰衡平治の後同年九月彼地のまう臘ゐ
任せゝゑ實朝卿鶴岡八幡宮拝賀の頃も随兵ゐ加へゐよ
代々此地ゑ住ゑ親鸞上人東國遊化の時此地ゑ至ゑ清重
の宅ゑ投宿あり生時上人の弘法ゑ帰依し弟子乃禮と
儲け名と西光坊と号ゑ又居宅の地と搏しゝ寺院と営建
し直ゑ西光院と号く本尊の脇壇ゐ清重彫造まる木乃
聖徳太子の木像と安置せり
按ゑ東鑑ゐ治承四年庚子十一月十日戊午常陸國佐竹太郎義政同冠者
義季と叛逆して鎌倉ゐ襲ふ武衛ゑ聞て進陣し給ふ夜彼宅ゐ入給ひ止宿あり
葛西三郎清重ゐ縁ゑ以て参向し給ふ清重妻女と一寺ゐ建立し給ふ寺号ハ
備へしむ但し実ハ他所より青女と招くの由言上せしとあるも此地
みそのゐなるべし
清重稲荷祠　西光寺の西の畑の中ゐあり
古叢ゐして此所ハ葛西三郎清重の墳墓の地とゝゑ今稲荷ゑ
勧請せ　一年の洪あゐ此塚崩まて土中ゐ石槨あゝれ出ゐれハ土人蓋と
開きゝゑに蓋の裏ゑ梵字蓮花あり時槨の中より丈三尺五寸あまりの弥陀の木像ゑゝとり清重の名ゑも彫付てあり
又一寸八分ゑりの座像あり今西光寺ゑ収むゝ除武具のたぐひもゝゝとゝいへり
青砥左衛門尉藤綱第宅舊跡　青戸村ゐあり　土人云昔ハ青砥後世改めく青戸と唱ふ
永禄二年小田原北条家の所領役帳ゐ遠山丹波守所領の内ゑ
葛西青戸の号と注せり今割く二村とゝ西青戸春青戸と唱ふ
御殿跡とゝ称せ今猶四方五六拾歩の所除地ゐて老杉矯々
たる中ゑ小祠あり此村農人の中ゑ
字ゑ唱ふるありて皆其時世より呼来まるとゝへり

按ゑ北条九代記ゐ太平記ゐの書ゑ青砥左衛門ハ伊豆國の住人大場
十郎近郷の渡裔ゆて近郷業久のしゑ字治のゑゐ向ひえ勲功ありられ
ハゝ勧賞とゝて上総ゑ青砥の荘と賜りしく云々藤綱ハ藤綱ゐ妾腹ゑ生れて末子ありとゝ
藤綱ハ藤綱の妾腹ゑ生れて末子ありとゝ云こゑるとゝへ青砥荘ハ上総國かゝる
十郎近郷の渡裔ゆて近郷業久のしゑ字治のゑゐ向ひえ勲功ありられ
ハゝ勧賞とゝて上総ゑ青砥の荘と賜りしく云々藤綱ハ藤綱ゐ妾腹ゑ生れて末子ありとゝ
上総ゑ夷灘郡臼井の仁中村國香とゝ云人のあらゝせ一房統志料とゝ書こ
さゝれとゝ上総ゑ夷灘郡臼井の仁中村國香とゝ云人のあらゝせ一房統志料とゝ書こ
上総ゑ青砥荘とゝ唱へ来るゑ既ゐ久しゝとゝりて定めゝ此地ハ
青戸と唱へ来るゑ既ゐ久しゝとゝりて定めゝ此地ハ
古墳ゑ考へとゝりて藤綱ゐ
跡と称ゑる地あゝと現然とゝ
古墳ゑ葵擦　此地の農民茂右衛門ゐ
りてあれゝ是ハ是非ゐ
古墳ゑ葵擦　此地の農民茂右衛門ゐ
上古質朴の風俗と想像ゐ

挙るのみ土人此器と青瓶たゝら工夫ふ出ると云伝れとも其可否ハ論まらず今も路加辺の農家是と用ゆるものあり其図左のごとし




全形図のごとく杉とりく製を竹の厚きと鋸の歯乃ごとくゆひて夫を横の抜へも切る横抜の上より同く竹の縁と打付て動ふねゆふふーる物ありと或人乃説り菖蒲華よ〻かくのごときひおろーと紋あるて俗よねきと借てひもせーゆんと是ろうんぬ又下よ図まる掬もを襲大方同うーて形もこーく異あり

## 木下川薬師堂　木下川村ふあり

土人作るとものくる人の所領の内此地名ありて文字木毛川ふ作る

## 青龍山浄光寺薬王院と号を天台宗り

本堂　本尊薬師如来　傳教大師の作昭士日月十二神将の白鬚明神祠縁ハ恵心僧都乃彫造なり本堂前左の方ふあり廣智達ゆの昌翁と号る小田原北条家の所領役帳ふ朝倉平次郎本地不動明王の像ハ慈覚大師の作垂迹の姿ハ老翁の木像ゆて菟本作りな異相あり詳ふ本尊薬師如来縁起の条下り

## 東叡山ふ属せり

## 天照太神宮　神躰ハ両宝童子ゆて本地弥陀如来の像ハ恵心僧都の作なりむうーと云

## 山王権現宮　神躰ハ一塊の真石ふして本地ハ薬師如来なりむうーと云

## 雑財天祠　大門乃内右の方にあり

## 東照大権現宮神影　往昔慈眼大師曰く神祠ハ御本地薬師如来我幸ふ持る不の畫影と寄附もくーくて親ら點眼供養ーくそまうり神像乃上ふ自筆をとり題ーて曰く

帰命満月海　淨名瑠璃光
因中十二願　法樂救人天
東照大権現　三國傳燈
山門執行探題　天海開眼

かくのごとく讃と添くれ其時の住侶某ふ附属ありて今猶此くく毎歳四月十七日本堂の内ふ於まうけ諸人をーて敬拝せーむ

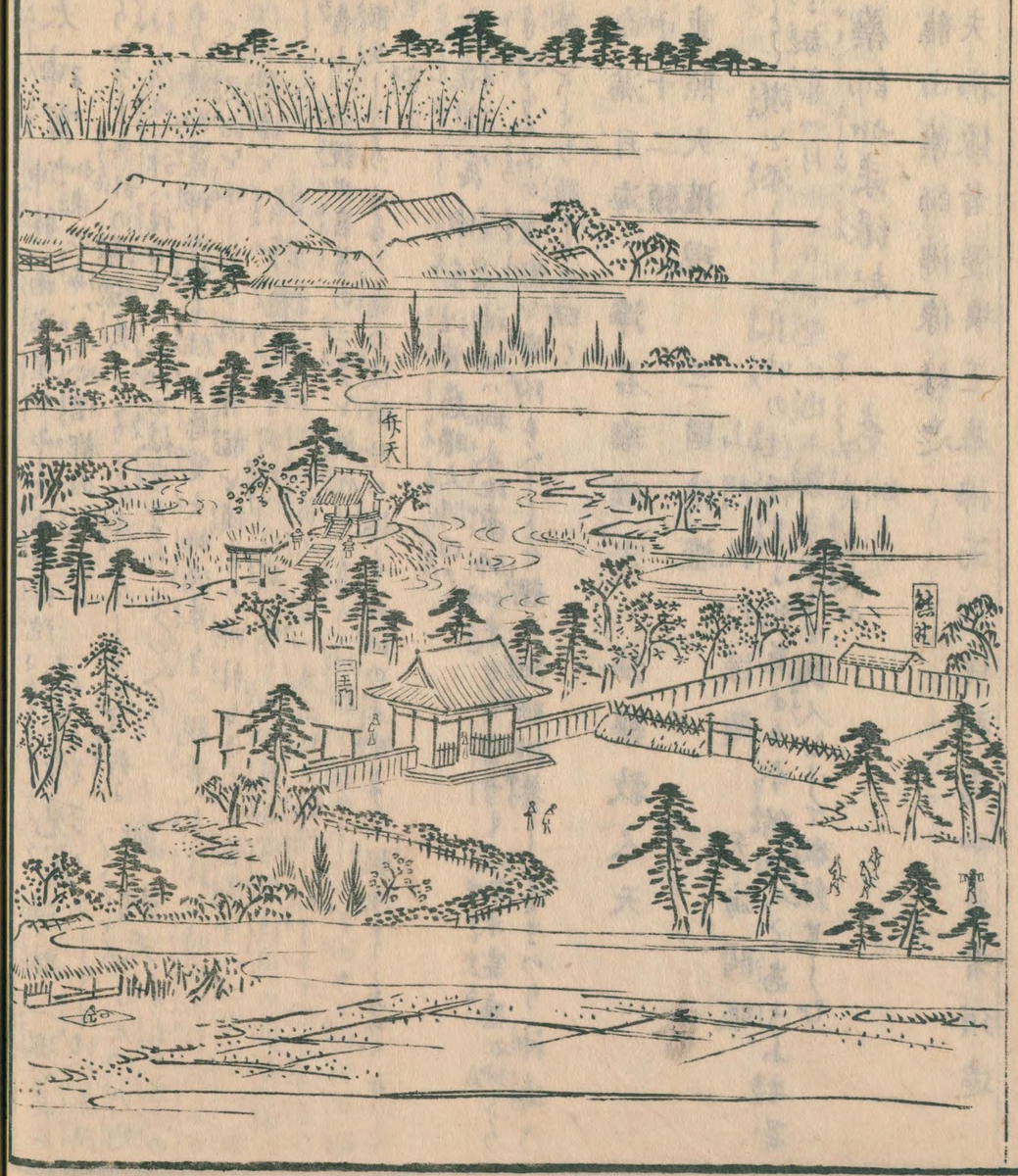
## 本尊薬師如来縁起　一巻　其文如ー

青龍山薬師佛像縁起
原夫佛像者優填王慕佛而刻像初焉伽藍者須達

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

江戸名所記ニハ
ゆゐ〳〵しき毎月
八日なりひら
元三の朝ゆゑ
うつしたす本尊
の像前ニ新燈
あらん哉まいる
人〳〵すくなとあり
されと昨日今ハ
絶ることなく土人も
おほしとぞ

木下水ノ薬師堂




国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

紛無則附居謂翁髮是東靈何智是天像大我像之故尊乘佛無布
亂人下之處此曰白何還應處而日明腰師當告日再是止像量金
奇家總耶所翁我如常到之耶語欲此見曰行曰佛刻也觀者之祇
香唯國於以容待雪唱武地大夢還時今像也如像藥其院傳生園
薫有郡是然儀像容佛州也師事野下不已大汝己師後自教也始
郁一今乎者心者眼名偶汝對智州野拜靈師所成佛大刻大肆焉
智草之翁我非久賡居然夫曰感告國像異俄念但像師等師下爾
喜庵地與奉常矣素在逢隨信喜別大腰不覺我未今思身所總来
而于也智特人汝而葛一佛知而耳慈者煩時欲琢青念藥造國佛
附時四及佛故所氣飾老意佛問大寺蓋復四利彫龍彫師也葛像
像此望從像對員象郡翁廣意曰師有由彫更益像山刻佛初飾伽
於地瞻者者曰佛超木其智非然黙釋之乃也東腰之一像延郡藍
翁震眺東正願像凡下名曰凡則然廣也止便國其本佛安曆青徧
而動唯入是我當相川唱諾所生而智而因起之夜尊像置七龍満
智紫見荒生欲安見野翁謹測身知者大之拜衆大是當之年山三
問雲茂原身一我欣年不隨只佛佛來師自像生師也化今於淨千
日降草行佛見草然可知佛東也意在不以感明夢大益中叡光之
我垂贖數也老庵傾九其意州不附叡知錦歎旦所師東堂山寺界
此瑞野里豈翁智慰十姓因自知於山便綉恭有刻彫國之創藥利
地花曽至輕之思唱鬚字負有安廣至到纒敬便佛刺以本一師益

思恩汝果識去傳留靈出雲龍龍山宿曰等力等語知官時不當
寺動放吏識唱言營獻今草以不能告青臨像淺被村必汝等而建
居院光及来翁是之供夜庵青動加青龍東彼草現里来等若還伽
既之覺冨而之我此耳夢漸龍垂護龍到北像寺益道此暫能爾藍
而像大民建支之地覺或至至頭之曰庵忽傳一者俗營合至後如
告是師等寺曰願伐大人清今而莫吾所然教日多目練心心翁何
村也思傾於翁也木師告旦時聞令有拜起大有矣送若護歸語答
人此必財此聖師交告曰里時言不一佛瑞師白其天吾此請村曰
曰時靈戮聖者能荊村貴人有己祥言像雲所髪後際若此必民時
堂覺材力語也企新人人數龍龍自神而青造翁慈追遅地有曰縁
宇大自于不翁造為曰寓輩燈形今龍青龍也来覺共歸亦感過未
未師刻時虚欲營靈我草捧奇隠以聞龍現言曰大深傳好應日熟
成或不庵師去我場欲庵珍瑞覺神之猶雲已東師信吾建也吾汝
雖時動中其告等則建子膳者大龍吾現中形北東誓語練我已且
然在明有人衆誓不寺等而其師為欲在覺隠有方首語若有得還
吾淺王尺也曰努亦於盡至此為護建覺大慈靈行自畢後西安去
志草像餘於後力宓此餉問謂吉伽寺大師覺地化是凌時州靈於
在寺今靈此時村乎汝焉其乎徴藍於師潜大吾之靈空有之像是
弘或堂木合有人村等故故其即神此向出師安時感而善行自智
通時西時郡善亦人合我對夜名青神瑞寺便置磬滋西知未今止

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

所期未果不得久停明日當去他日再来耳又告弟子慶寛曰我以此山附汝遂歸本堂並釋迦二尊營自構為鎮護之靈區營盡心於講堂近佛像鐘樓備遠緑造多血朝灑造或見像或来佛或生大指来刺後錄乎源信菩薩僧朝合一菩薩十無舊

嘉暦二年夏六月十五日住持沙門義純謹書

本尊縁起曰延暦年間傳教大師東國化益の為彫刻小於一

藥師佛を彫刻し漸半ばる頃一夜此當像大師の夢ふ告て曰く

汝う念ふ所の如く我東國の衆生と利益せんとす明旦便あり

我ふ待へしと大師驚き覚ぬ然ふ明旦下野國大慈寺の廣智

其頃叡山ふありし此日歸らんとす

ふ謁をふふ於て大師佛意と悟ふ

像腰を彫刻せしめて錦綉とりて是と纏ひ廣智ふ附属を

我ふ先大師ふ別と告んとす来

明神翁欣然として云く我靈像の到る

ふ安きへしと云智喜んで彼像と翁ふ

と告翁云時縁いまし熟せり汝且還ふ去ふ遂ふ依て廣智ふ此ふと

思ひ止ふ郷里ふ歸る爾後翁村民ふ語て云く後善知識ありて必

ふ来ふ練若と営ん我今西州ふ行ふ若歸ふ来ふる遅

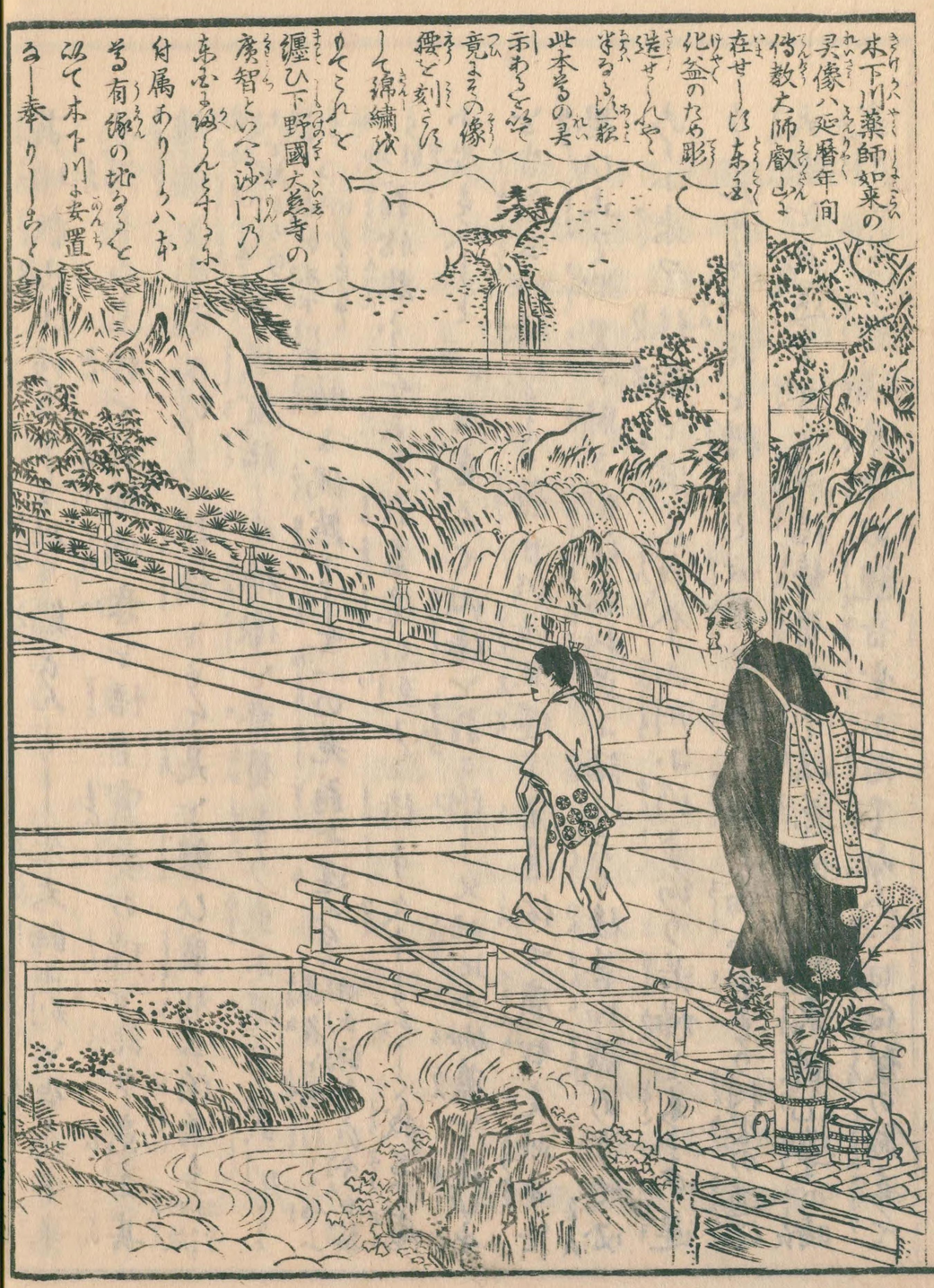
ふんふを此語と傳ふて云畢ふ空と凌く西ふ去ふり村里の道俗

天際と見送ふ共ふ深信瞽者を生ふ後慈覚大師東國化導の時

武州ふ到ふ暫淺草寺の観音堂ふ留ふふ一日白髪の翁ふて

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

浄光寺縁起ヨ
弾ヲリ



本下川薬師如来の
霊像ハ延暦年間
伝教大師敬ふ
在せし
化益のため彫
造せしんや
ぎるとぞ
此本尊の霊
示あるを以て
竟その像
櫻と刻うて
し綿繍枕
りそこれと
遷ひ下野國大慈寺の
廣智という沙門乃
東ふ遊んとするふ
付属ありしハ本
る有縁の地なると
以て本下川に安置
る一奉りしと

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

大師ふ告て云く此所より東北よ靈地あり藥師乃靈像ぶ
安ぎとひ畢て後生ぶ方を失ふ大師東北を望ふ忽然として
瑞雲起る中ふ青龍現を依て奇異の思ひをるー潜ふ寺を出て
至元ふむ玉ふ果して藥師佛の靈像あり此時村人等集り来り
前の唱翁ら言を告大師をして其人となり
及ひ富民等財を傾けく寺院を建立せんとも則弟子慶寛よ
此地と附属ありしふ慶寛営構の志を励し貞観二年の春よ
至る諸堂落成をふに於て慈覚大師を開山と移し往古乃
瑞ふ因く山を青龍と号ぎ朝廷其瑞應を聞ひ田園百畝
を賜ひ永寺供よ充ぎ後恵心僧都二臨士及ひ十二神将ふの
像を彫刻ありて佛前ふ安せる又慶寛十二大願を表して
十二の衆徒を置十二院と合せて浄光寺と号くるとあり
當寺ふ草創より已降九百四十有餘年と経る古刹ふしく
本尊ふ光を一天ふ耀し十二大願の衆徒ふ靈を山中ふ蔓へ
日夜の勤行怠慢なく法燈周を越く赫くとりしよ
闘爭國々ふ起る頃堂宇ふ破却し寺領ふ
没収せらるぎ又ふ兵燹ふ罹まて焦土とあり殘る佳物も
なく唯本尊のく草堂の中ふ在せしふ天正の末四海昌平よ
歸しきりし後同十九年住僧良完愁訴して竟よ某師堂
領の朱章を揚ありふ志ろひりしを
忽ちふあく本尊の靈驗いよく
著しくあり

中川　隅田川と利根川の間ふ夾まれて流るる所ふ中川の号あり
とものて荒川の分流熊谷の辺ふて遠く埼玉と足立
とふ両郡の合と流ぎ利根川ふ入る川俣よりもりて
二水接う俣の辺ふて合一阪塚大谷亀有新宿等の地ふ添て青
戸奥戸平井木下川及ひ小村井逆井と経て海ふ入猿う俣より
未ぎ中川と

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

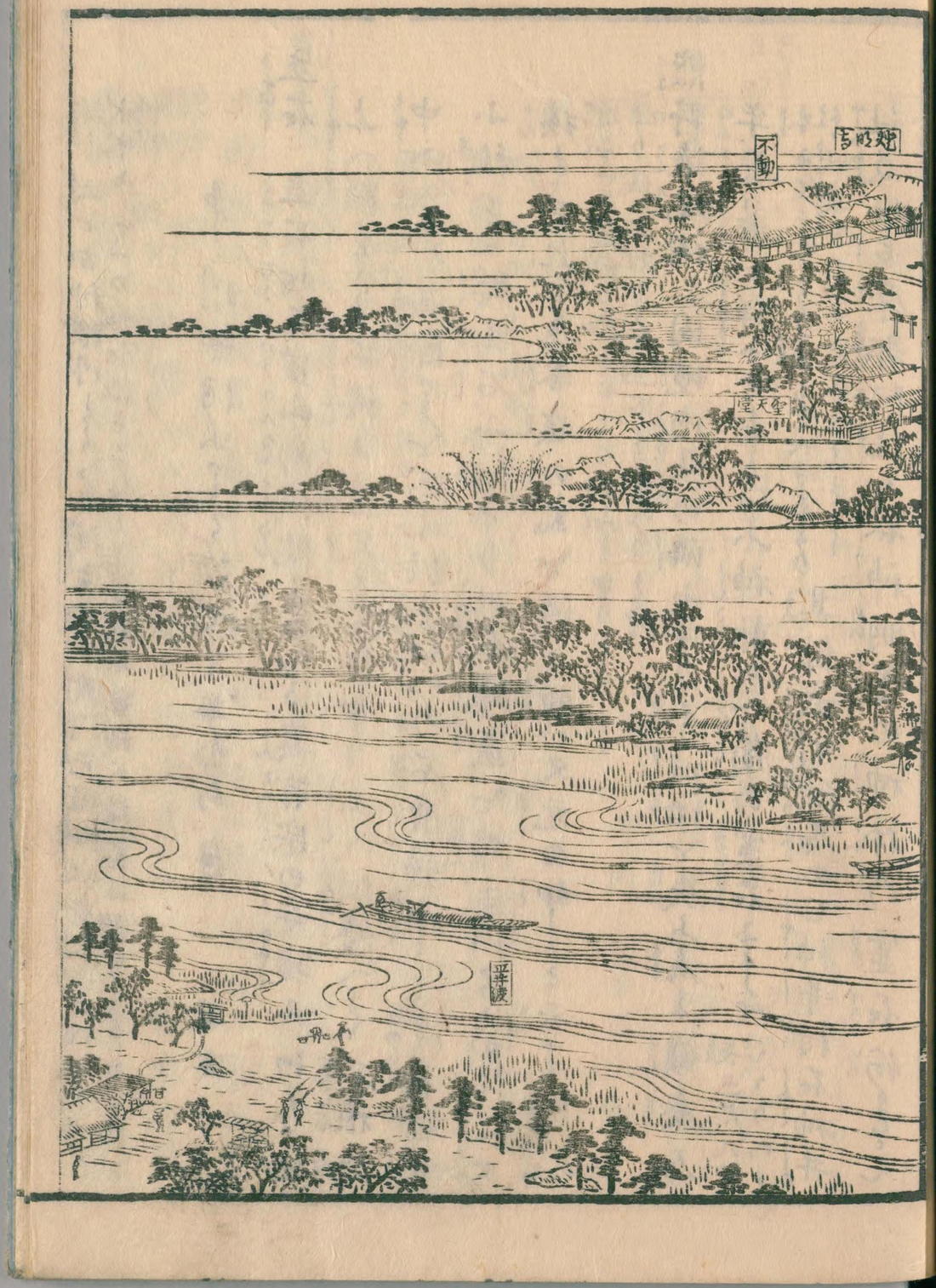
ガラス使用

## 中川釣鱚

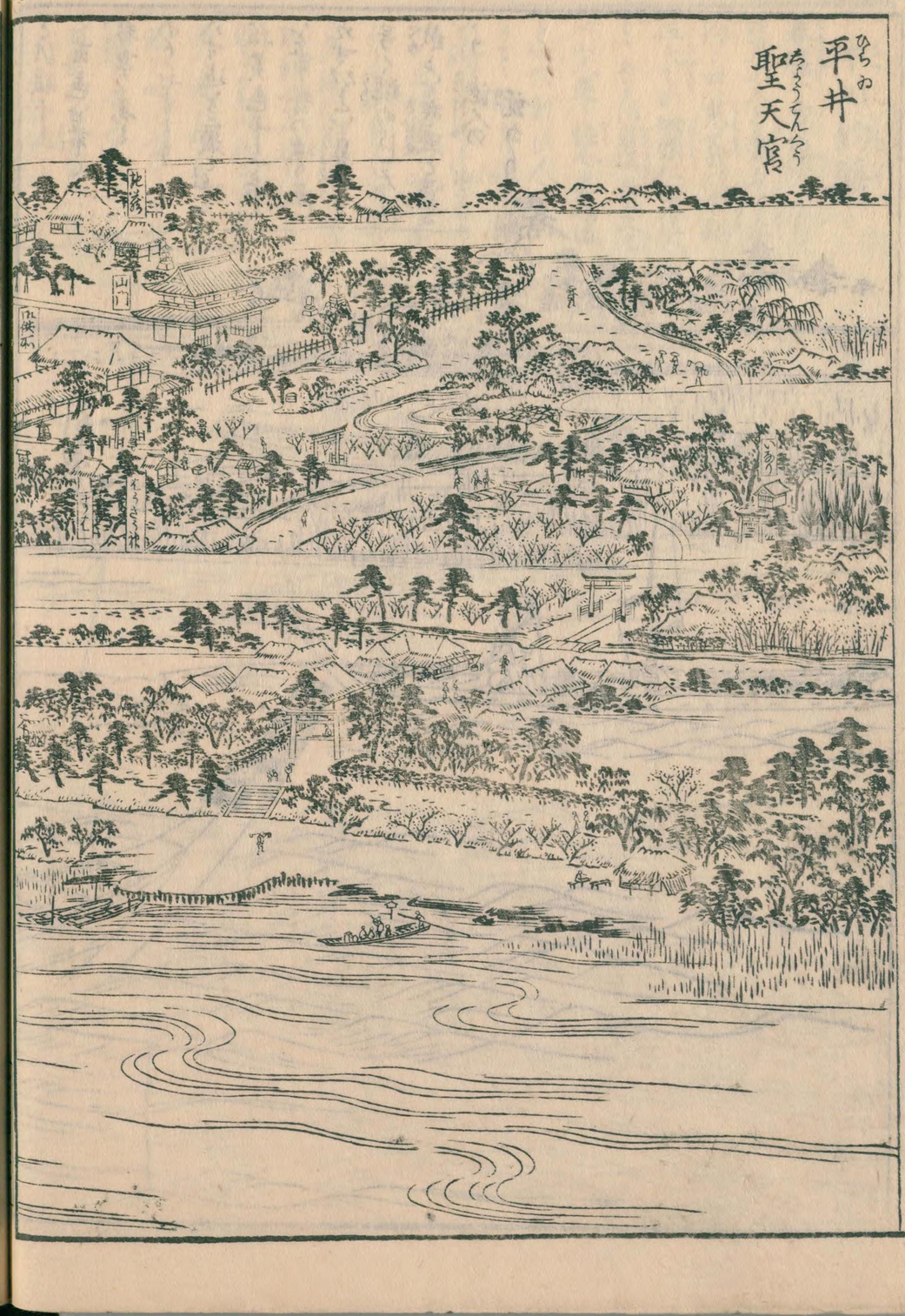
春鱚ハ三月の末より四月小入迄盛り春釣と云ハ蜜丸文のし南総伝七その船頭仁兵衛と云ハ岩淵兵左衛と云ふ人是ハ継ぎ岩淵流とのみハ則ち人より始りて云ふ後春鱚を釣ります世ハ蜜丸より云秋鱚ハ八月の末より九月迄ありと雖ハ節とハ云ながらも十月迄寒気ゆるれバ止り出る氷川鱚ハ白魚漁人海を産する浅白鱚と呼川あるを青鱚と唱少し鱚より大小の差あり寸法歳ハ一歳白く五六寸ありて二歳ハ暖すれバ黄色を帯て脊赤のあり七寸より八寸迄を二歳と云ハ後黄色ふして赤を帯脊の通り悪九寸以上を鬼曲と号く鱚めしたゝハ越ると寒風と唱るハ漁人の説なり

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用




# 平井聖天宮




国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

…上を古利根水と称し根水…水戸黄門光圀公水府入…の流れ中川乃中川と命ぜしより年々宇治へ諸茶を登せこれを…

## 井川やほとゝぎすも此あたり　嵐雪

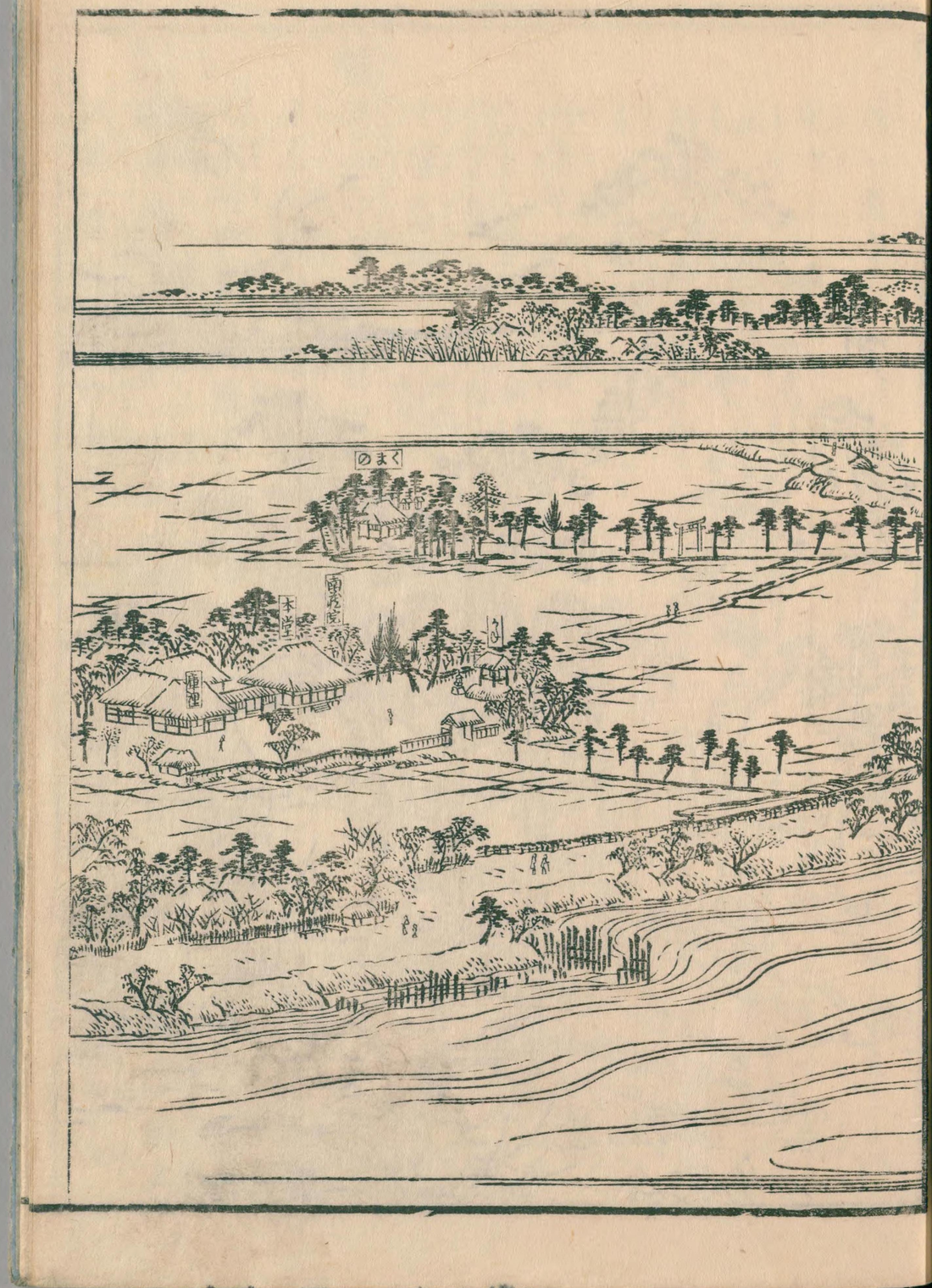
立石　立石村五方山南藏院と号する真言宗の寺境内にあり地上へ顕はれる石纔に壹尺ばかり土人相傳へて石根地中に入る其際まを…石質弱みして色世間小松にも似たり此石寒氣を帶ぶれば…馬も…ず春暖の氣を得る時は又元の如くと云ふ古…近々四五箇村の名を立石と分ち今旧地を失ふ…より徴すべし此村のこと

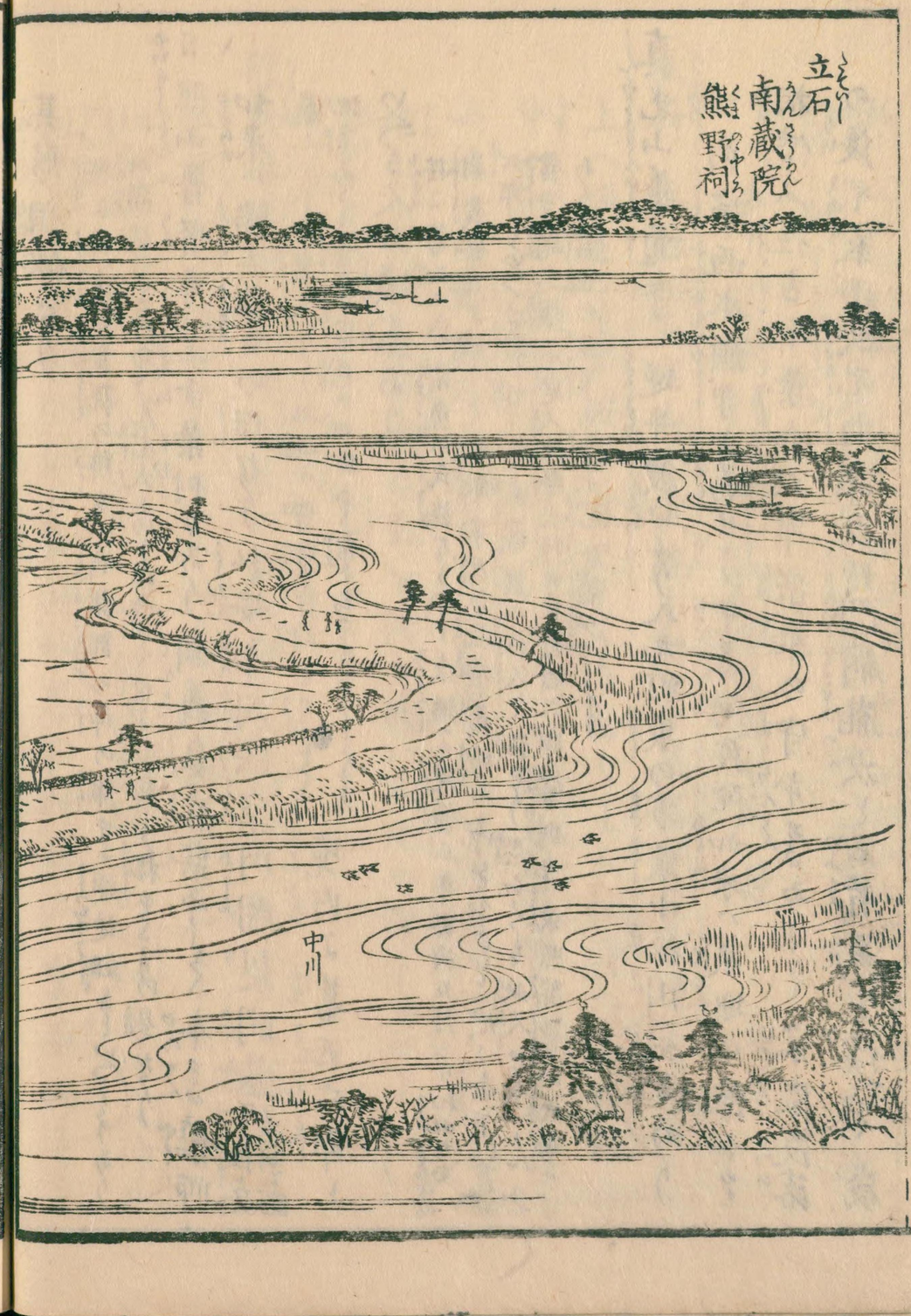
熊野権現祠　同境内艮の隅にあり今鎮座乃年歴等を詳にせざれども神躰は一簡の靈石にして長二尺八寸本末二尺ばかり来て六寸ばかり其餘武州練馬の石神井村石神井杜及び多摩郡阿佐ヶ谷神明等の神躰乃靈石何れも其形相似たり

日照山普賢寺　上千葉村にあり新義真言宗にして本尊藥師如来は佛工春日の作なり弘安年間法空阿闍梨開基にて往古は寺院廣大なりし此辺は普賢寺村と号し地名あるも當寺領内は葛西六郎と称する人の寄墓ありしとの傳へ…

按ずるに葛西三郎清重の氏族なり東鑑に建暦三年癸酉五月三日和田左衛門尉義盛兵を起し…將軍家及び執權義時の…を…六郎と称せり武藏國の住人と…當寺過去帳に建仁元年三月廿日葛西六郎常則卒栄照院常山大居士…あり當世の法号の…尤不審少からず

真光山善通寺　逆井渡口より八九町東の方東小松川村にあり一向宗西本願寺に属せり本尊阿弥陀如来は来迎の像にて相傳ふ往古千葉介太郎宗胤の守本尊にして宗胤没落の後家臣秋元刑部左衛門尉胤次と云者是を傳へて歳




国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

月と歷り後親鸞上人亂次ら家ふ止宿せら里一頃
亂次上人の宗化ふ帰し一室と営ミ此本堂と安す慈
永正年間兵火ふ罹りく堂宇悉く焦土とありしとおそ
持退て恙なりとり天下承平の時ふ至り終ふ一宇と剏く
善通寺と号くとぃ
阿弥陀如来画像一幅 中将姫製 秋元刑部左清の子孫今も此村の内ふ四十有余戸存して
あり、自の毛髪ふて織ありとぃ
八日より同十日迄此像と掛く諸人ふ拝せーむ往古も盛ふ
賑難ふ逢とぃくも盛ふのりて失ぃ千とぁり
十字名號一幅 親鸞上人の真筆とり昔上人此地ふ籍の縁ふて御首の
名号と書てふへらまーとぃくとぁり毎年四月
醫王山妙音寺 東一ノ江村ふぃり真言宗ふて建久元年秀栄
上人開創ぇる石の精舎とり阿弥陀如来と本尊と為ぇ置
の薬師如来ハ立像ふて佛工春日の彫造とりと云傳ふ古銘無
安房守某とぁる人の念持佛ふて靈威の著像とりと云雑纂天
女宮ハ堂前池の中島ふありて寺記ふ寶治元年丁未勧請ぇと云

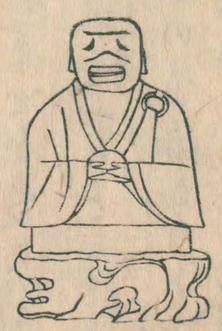
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

菩提西六鄕塚墓

菩提西上ヶ村
番賀るの境内
ニあり

賓頭盧尊者像

堂中ニ安置セ寺僧作ヘて
佛工春日の作ありとぞ
高さ一尺ばかりゆり荒木造り
そ容貌甚異相あり



覚山妙勝寺　西二の江村古川の通りニあり日蓮宗ニして中山
の一鵞寺葛西の觸頭なり弘安年間　日尚上人乃
草創ニして宗祖大士の像ハ日祐上人の作なり　或ハ徳治二年丁未開創とも云
宗法盛なりし頃一夜宗祖上人微妙の音声ありて讀経まします
空中ニ感得の影像と摸造して開眼供養し日祐上人ハ中山の第
三世なり延元年間
浄土置る比丘尼ハ世俗讀経の高祖大士と称せり夫より後ハ修飾と加ふる毎ニ中山ニ告る
ずや今ハ中山累世貴主より縁ら
水神宮　日尚上人ハ當寺開創の主ニして平氏
十四歳ニ年の夏いつる方ならや洞舟ニて
魚人五郎何某ニもの助けニて其生来と聞て
遠ク中山の日高上人を招して弟子の
傍ニ草菴とひとりけ出家得度ニ依て此地妙見山の
漂蕩あり一頃深く水神ニ祈誓して波浪の
時ニ上人の遮眼となして終ニ退ク一歩の法味
ニ遇ハ此水神宮ハ日尚上人初洞舟ニ乗一
報恩のくわ此海上ニ
遇ま一つらまつりしと

龍亀山浄興寺　清泰院と号ス上今井村渡口より二丁ゝゝ

西北ゝあり浄土宗ニして縁山ゝ属ス鎌倉光明寺乃開山記主禅師良忠當寺ゝ草創ス中興ハ増蓮社頓誉上人源清和尚と号ス本尊ハ阿弥陀如来ゝ

東土産

思ふ世ハ立ゝて江戸の繁昌ゝ

或人安房の清澄と一見せんとて一宿して角田川の河畔ゝ杉ゝを

素拙

ゝとり姫江のこなたにして渚土ゝの寺浄興寺ゝ

遊へる人沽酒みもろの花ハ猶ふるさとの匂ひ残れり

富士の根を雪ゝぬ書の名里ゝ

宗長

方丈の西ゝむひ書くのりあくこえゝゝ

按ゝ此ゝ宗長の紀行ゝとゝる八譲ありて宗祇法師の紀行ゝとゝる八譲ありて世ゝ宗祇法師八文亀二年七月つゝりゝ渡ゝる由終焉記ありひ扶桑隠逸傳等の書ゝ宗祇ゝ永正八年文月十六日思ひゝゝねとありて考ゝるゝ永正八年此紀行の始ゝ永正六年文月十六日ゝ宗祇終焉の地ゝ至ゝ年ゝ経ゝる年号ゝより後ゝ宗祇ゝ歌のゝりふゝ一宿ゝてとありて江戸城のゝみありゝゝゝれハ此城上杉の多ゝ属ゝ朝良朝興ゝとゝゝ又按ゝ江戸の琴弾松

同境内堂前ゝあり

鬱蒼ゝとゝて繁茂せり天文十八年北条氏康當寺ゝ宿ゝらまゝ頃松風入琴ゝとゝゝ題ゝて

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

二之江
妙勝寺

二の江より今井
舟堀桑川のあたり
小産もる海苔と
世ふ葛西海苔
と称す本草ふ
所謂紫菜の類
ゆゝく滅草海苔
よ異なり

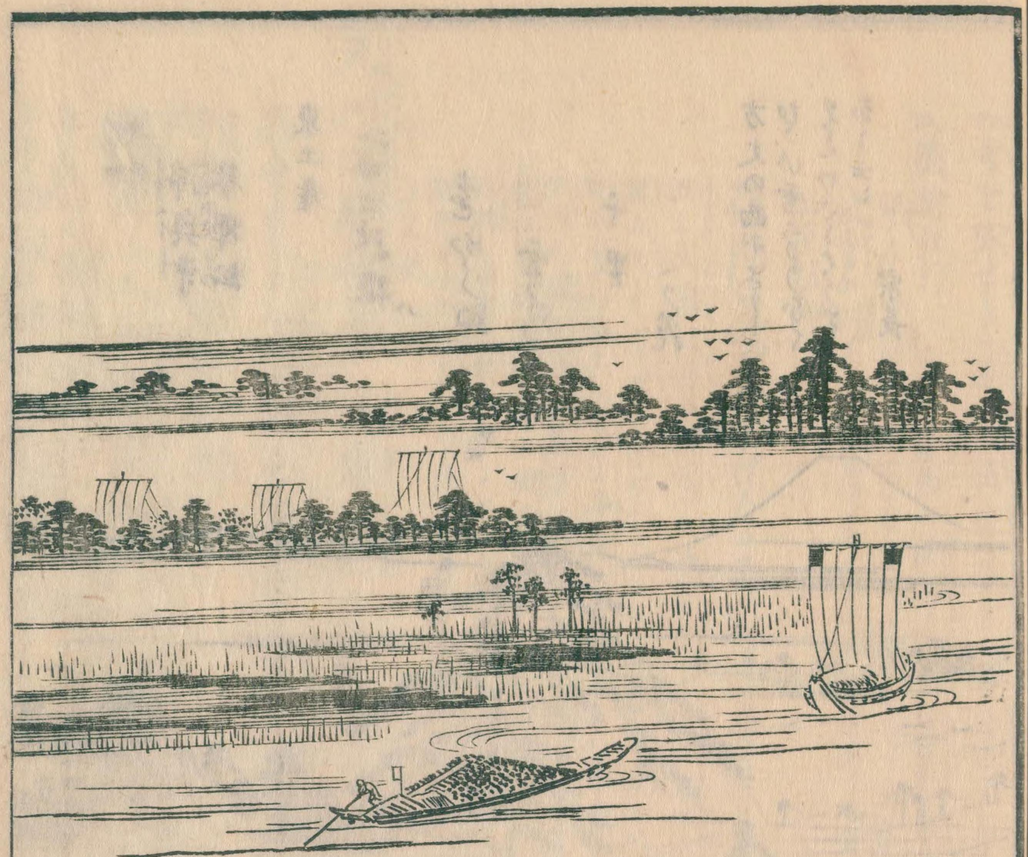
## 今井の津頭

栄屋軒宗長ら永正六年の紀行東土産ら隅田川の河舟よて葛西の府のうちを半日もてのり鼓茅をあのき今井といふ津より下て浄土門の寺浄興寺ふ立ありてとあれいもあくさり

此津の

ありさま

あらんれたり



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

今井
浄興寺
琴弾松

東土産
富士北根
八
きやかぬ
雪の
千里
こゑ

方丈の西みさ
きひし雪くもりをく
ゆくえにくるもろも
ありと云く
宗長

和哥を詠せる是より後琴ひき松と号せるなん

武蔵野紀行

浄興寺の荘浄妙なるのせきと年八十あまりおほえされハ洲をそゝり
一宿寺門ふかく一宿をかり松風入琴とゝめてを
ありひねそ

北条
氏康

松風の吹をさけハよもゝくあらくこと
按ル氏康紀行ニ記せる浄興寺を世人ホ下川の浄光寺よ思ひあやまれるなり
既ニ久し寺号ハ似たれとも文字與と光との違ひあり氏康宗長の
共ホ文字浄興ホ作るときハ弥寺を下川の浄光寺ハ慈覚大師開創の精舎ゆゑ天台止観の法燈赫
當寺ハ記主禅師の開基ゆゑ旧より浄業の仏剌なり殊ホ木
古拙もあり又東土産よ述るゆゑ庭前琴弾松と称する
眺望まる不宗長ゝ句意よたゝゆるなり然る時ハ峯ホ相對
ありひねそ

天川山妙福寺　下鎌田村よあり浄興寺の北二町斗を隔ル浄土
宗ゆゑ上今井村金蔵寺ニ属せ中興開山ハ徳誉岌公和尚と号
本堂ハ阿弥陀如来なり

親鸞上人御影堂　本堂の前左の方よあり時よ弘長年中早魃ゆゑ里民の歎ホとゝく
此地をよきりの時よ雨降ゆゑ上人清匁の祈念ありしハ我日の前雨降ゆゑ
三年帰洛の頃自身の肖像を造りくゝふ残し置ゆゑり毎歳四月八日より

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

天文十五年九秋小田原の
北條左京太夫氏康むさし
野小鷹狩の時葛西の
浄興寺よ一夜のやどりを
もとめられ松風入琴と
ゝる和哥を題
そ詠せしも
しるし
武蔵野
紀行よ

松風乃
吹こゑ
きけ、

北條氏康

ゆる
ゆるく
きゝ
ゝる
きそ
かゝく
弥

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

839
20
57

同十日迫佛龕を開き親鸞上人の御影を奉安し因道俗群集す

鏡ヶ池　本堂の後にあり上人自ら影像を造りたまふ故に此池に面影をうつす

袈裟懸松　同所傍にあり旧樹ハ枯く今若木を植ふ

太子堂　本堂の前右の方にあり御影堂に相對せり聖徳太子の霊像を安ぜ太子自ら作らせたまふと云伝ふ毎歳二月廿一日法會あり

帝釋天王　柴又村経栄山題経寺に安置す　江戸二里半

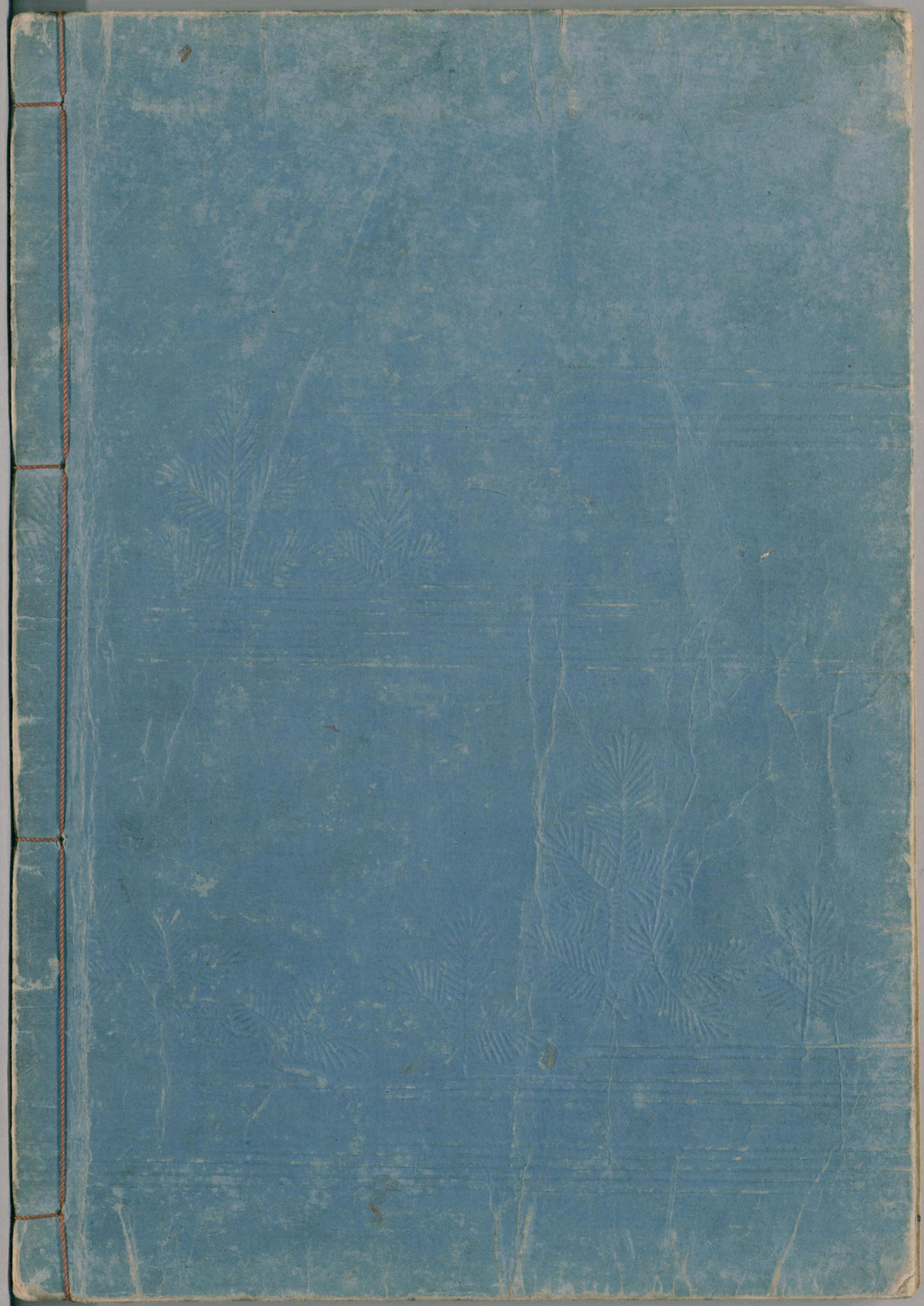
當寺ハ寛永年間の草創なり

縁起云當寺第九世日敬師在住の頃堂宇大に破壊を師深く是を歎き普く四方に行乞し再興の志を励し終に其堂舎を造改んとする時梁上より此板おるを得り旧當寺高祖大士手刻の祈禱本尊と称するものある由云伝へしるの縁

此時に至て空

則本尊を安置す　長二尺弄幅一尺弄厚サ五分半ある梨板なり片面ハ中央に首題左右に両尊四菩薩又癈朽消滅ぞの数字を刻し其下に五月日とありて大士の号あり右の方に花押を印せり又片面ハ帝釈天王の影像あり右の手に鈷を持し左ハ開きて怒の相を顕し悪魔降伏のそ容是除病延寿のお守なり信徒の輩ハ是を印し与へ黙禱あるべし　祈代のお守なり

推古朝の四天王寺より初めて帝釈天降臨ありし庚申の日なり當寺の板本も又庚申の日を以て出現も又因縁ありと云伝ふ



国立国会図書館　　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用